

水俣地元学から紡ぎ出す地域開発における外部者の役割
- JICA 研修員への地元学研修を通じての考察 -

日本福祉大学
坂西卓郎 205 V 7268

目次

はじめに

1章 仮説、言葉の定義	・・・	4
1 - 1 仮説		
1 - 2 外部者とは		
1 - 3 地元学とは		
1 - 3 - 1 地元学とは		
1 - 3 - 2 「土」と「風」の地元学		
1 - 3 - 3 あるもの探し		
1 - 4 地元学の誕生		
2章 JICA 研修 - 0 従来の地元学研修	・・・	13
2 - 1 JICA 研修 - 0 スケジュール		
2 - 2 JICA 研修 - 0 のポイント		
2 - 2 - 1 「地元学の背景」の欠如		
2 - 2 - 2 象徴としての「絵地図を持ち出さない」という行為		
2 - 2 - 3 疑似体験としてのあるもの探し		
2 - 3 JICA 研修 - 0 での課題		
2 - 3 - 1 あるもの探しの捉え方		
2 - 3 - 2 JICA 研修 - 0 参加者の感想		
2 - 4 隠されていた実践編地元学		
3章 JICA 研修 - 1 地元学探求の始まり	・・・	19
3 - 1 JICA 研修 - 1 の取り組み、スケジュール		
3 - 2 JICA 研修 - 1 での狙い、ポイント		
3 - 2 - 1 取り組みその1 水俣病歴史考証館見学、水俣病患者の話		
3 - 2 - 2 取り組みその2 ワーク「私の村、あなたの村」		
3 - 2 - 3 取り組みその3 カメラを使わない		
3 - 3 JICA 研修 - 1 での成果		
3 - 4 なぜ地元学は水俣病を背景としているのか		
4章 JICA 研修 - 2 見えてきた実践編地元学	・・・	25
4 - 1 JICA 研修 - 2 のスケジュール		
4 - 2 JICA 研修 - 2 での取り組み		

4 - 2 - 1	地域づくりに貢献したごみ分別	
4 - 3	JICA 研修 - 2 での成果、反省点	
4 - 4	実践編地元学への第一歩	
5 章	JICA 研修 - 3 実践編地元学の扉を開く	・・・ 32
5 - 1	JICA 研修 - 3 のスケジュール	
5 - 2	JICA 研修 - 3 の取り組み 富吉正一郎氏のアプローチの検証	
5 - 2 - 1	インタビューから抽出した風の地元学のエッセンス	
5 - 2 - 2	テーマ1 「導入 - 地域にデメリットはない」「財政支援なし」	
5 - 2 - 3	テーマ2 「村が化粧をする。その理由をつくる」	
5 - 2 - 4	テーマ3 「教えるんじゃなくて村の人の力を引き出す」	
5 - 2 - 5	テーマ4 「ここで死ねて良かったと思えるように」	
6 章	5 - 3 JICA 研修 - 3 の成果、反省点	
5 - 3 - 1 - 1	事実を聞くことの難しさ	
5 - 3 - 1 - 2	あるもの探しの難しさ	
5 - 3 - 2	共有化段階での課題	
5 - 4	問題解決手法としての地元学	
5 - 4 - 1	水俣病の水俣の課題とは？	
5 - 4 - 2	村丸ごと生活博物館の課題とは？	
5 - 4 - 3	きっかけづくりから課題解決型手法へ	
5 - 5	実践編地元学での外部者の役割	
5 - 5 - 1	作法その1 「地元の人意識を超えない」	
5 - 5 - 2	作法その2 「否定から入らない」	
5 - 5 - 3	作法その3 「人探し - リーダー論はいらない」	
5 - 5 - 4	共有化段階における外部者の役割	
6 章	仮説の検証	・・・ 48
6 - 1	仮説の検証 実践編地元学の創造に向けて	
6 - 2	JICA 研修を通じて、地元学から紡ぎ出された外部者の役割とは	
6 - 3	入門編地元学と実践編地元学の関係性	
6 - 4	姿が見えてきた風の地元学実践編	
6 - 4 - 1	地元学の限界	
6 - 4 - 2	風の地元学実践編への道標 問題を正しく「観る」	
おわりに		・・・ 54
参考文献		

はじめに

彼は跪いてこう言った。「カメラを下さい」と。彼とは南アフリカ共和国のソウエットという黒人居留区の NGO ワーカー、S 氏のことだ。S 氏は続けてこう言った。「ソウエットでも地元学、あるもの探しを行いたい。地元学は素晴らしい概念だ。しかし私たちはカメラを持っていない。カメラがないと地元学はできないでしょう?」。これが「ないものねだりをせずに、あるものでやっていく」というコンセプトの元に地元学研修を行った帰結であった。私は強いショックを受けた。地元学は地元の人のためのものであり、地域の人による主体的な地域づくりをするのに有益だと思ってきた。そして、その主体的な地域づくりを行うために外部者の存在が有益であることを証明する概念であるはずだった。しかし、約 2 週間の研修を終えての結果は上記のようなものであった。なぜだろうか。なぜ「自分達が気づけていないあるものを探るところからやっていく」という考え方が、逆に「ないもの」であるカメラに目を向けさせてしまったのか。表現の仕方が悪かったのだろうか。地元学を通じて最終的に「ないものねだり」を引き出してしまった。なぜなのか。地元学に問題があるのか。それとも地元学の理解が間違っていたのか。この時のショックから本当の地元学、地域における外部者の積極的な役割を探求することになった。なぜなら、このことは水俣で外部者として活動してきた筆者の存在意義に関わるからである。

1 章 仮説、言葉の定義

1 - 1 仮説と枠組み

筆者は 5 年前に関西から水俣に移住してきた。関西では国際協力活動に関わり、水俣では地域開発、水俣病患者の支援活動に外部者として従事してきた。水俣での患者支援においては外部者の弊害と言える例が多く、支援が当事者の思いとかけ離れていたり、外部者が当事者を利用するという事例を目の当たりにしてきた。支援という援助行為のはずがなぜ当事者をないがしろにしてしまうのか。その構造を「水俣 50 年 ひろがる思い(作品社)」の中で「私の支援者論 オルタナティブな支援を求めて」としてまとめた。その中で上記のような弊害のある支援を指して「依存型の支援」とした。その仮説は「支援や援助には当事者を覆いつくす力学構造がある。その力、誘惑は強く、気がつくとも構造に取り込まれてしまうことがある。出発点は純粋な善意でも、結果として当事者に依存し抑圧してしまう」というものだった。そして自らの支援の経験から依存型の支援からの脱却への方向性を自分なりに示した。「支援の力学構造から逃れるために外部者としての自分を積極的に規定する。そのために支援の双方向性を認識する」というのが結論だった。しかし、これは自分の立ち位置や心構えをどう構築するかであって、具体的な方法論ではない。また「依存型の支援」にならないための論理であるので「どうすればよいか」という問いに

は「自分と向き合い問い続ける」としか述べていない。「外部者としての積極的な規定」もスタートラインに立つことはできてもその後の歩みを示唆してくれるわけではない。筆者は今後も外部者として地域開発に関わっていきたいと思っており、本稿で地域開発における積極的な外部者の役割、存在意義を明らかにしていきたいと思う。

外部者の積極的な役割を見出すにあたっては地元学を基軸に考えていきたい。地元学は水俣で生まれた地域開発の概念であり方法論である。詳しくは後述するが、地元学には「土」と「風」の地元学があり、「風」の地元学とは外部者にとっての方法論である。筆者は財団法人水俣病センター相思社（以下相思社）の職員として、地元学の研修を行ってきた。対象者は日本人だけでなく海外の地域開発ワーカーや研究者も多い。Japan International Cooperation Agency（以下 JICA）でも日本における地域開発の手法として地元学の評価は高まっており、JICA として水俣に研修を受けに来ることも近年増加している。筆者はそういった場で地元学研修を行ってきたが、有益かどうか半信半疑だった。地元学自体は地域開発において有益だと考えていたが、海外の研修員には正しく伝わっていない感じがしていた。その根本は日本人にも海外研修員にも全く同じ研修を組んでいたことにあるのではと感じていた。JICA 研修のファシリテーターである長畑誠は次のように述べている。「日本の地域が抱える課題と途上国の現場が抱える課題は、実はかなり近い」「しかし、日本の実践や経験を途上国の人たちへ伝えるには、何らかの「翻訳」が必要です¹」と。この「翻訳」に課題を感じていた。そこで地元学の理解を深め、研修を再構築する取り組みを始めた。その経過を本稿では取り上げ、外部者の積極的な役割を明らかにしていきたいと思う。

筆者の仮説の原点は「地元学から外部者の役割を見出せる」というものだった。地元学には「外部者の積極的な規定」以上のものがあると考えていたからだ。そして外部者の具体的な役割についての研究を始めた当初の仮説は「外部者の役割とは地域住民が地域への誇りを持つことの手助けをすること」であった。この仮説は地元学の事例を調べていく中で得たものである。しかし、研修と研究を進めていく中でそれでは不十分であり、地元学にはその先があると考えるようになった。その先、つまり本稿での仮説は「地元学は単に地域住民に誇りを与えるというだけでなく、課題を認識し、あるもの探しを通じて解決策をつくるための資源（あるもの）を地域内で見つけ出す。その資源を組み合わせ、課題を解決する課題解決型手法である。そして、外部者の役割はその課題解決策を見つける共有化の段階にこそ重要な役割がある。それは問題を課題として認識することである」とした。

なぜそう考えるに至ったか、そして地元学が課題解決型手法であることを JICA 研修 0～3 を検証することで明らかにする。筆者の理解の深まりは JICA 研修の回数と比例して

¹ 長畑誠「JICA 研修員受け入れ事業」『南の風 No.228』シャプラニール、p.4-5.2008

いるので、研修を振り返ることで段階的に明らかにできると考える。JICA 研修 - 0 は従来の地元学研修の例として取り上げる。従来の地元学研修とはイコールあるもの探しのことであった。そこでは地域にあるものを再発見するという事に主眼がおかれている。その流れを疑似体験するためのワークとしてあるもの探しがある。しかし、一般的には実践手法として認識されてしまっている。その理由と問題点を明らかにする。JICA 研修 - 1 は上記の問題点を解決しようとする試みだった。JICA 研修員の現場に合わせカメラを使わずにあるもの探しを行い、地元学がなぜ生まれてきたのか、その必要性を水俣病で破壊された地域の再生に求める。JICA 研修 - 2 では、そもそも地元学が主張している大切なポイントは何か。水俣の地域再生の具体例から明らかにしていく。JICA 研修 - 3 では、上記の水俣の地域再生や地元学の発展形である村丸ごと生活博物館の例から外部者の役割を模索する。そして、3つの研修を終えて今までの仮説が不十分だったことを知ることになる。その中身は隠されていた課題、テーマの存在だった。水俣地元学では水俣病によって崩壊した地域の再生であり、村丸ごと生活博物館では、近代化、村の過疎化が隠されたテーマだった。現在のあるもの探しも基本的には近代化、村の過疎化にどう向き合うかがテーマとなっている。それらの枠組みを明らかにする。結論としては、地元学は課題解決手法であり、共有化を通じてあるもの（あるもの探しで発見したあるもの）とあるもの（地域の人が持っている知恵、風習、情報など）を組み合わせることで新しいもの（解決策、または道筋）を作る、ということが可能であるという認識に至る。その共有化の手法は必ずしも明文化はされていないが、提唱者である吉本の歩みを辿ると大枠が見えてくる。その大枠が示すものが従来の地元学のその先、実践編地元学だった。

最後の仮説の検証ではそこを掘り下げ、外部者が果たすべき行動原理を紡ぎ出す。つまり地域資源の再発見段階を通じて、最終的には行動計画策定段階での外部者の役割を模索する。それらを「入門編地元学」と「実践編地元学」としてまとめる。ただし実践編地元学は未完の部分も多く、さらなる積み上げが必要である。その未完部分を中田豊一が『人間性未来論』で述べている国際開発における外部者の役割に求め、共有化、行動計画作りにおける外部者の役割をできるだけ明らかにする。本稿ではその全てを解明することはできないので、未解明の部分を明記して今後の課題とする。

1 - 2 外部者とは

外部者をどう定義するか。水俣では支援者という人達がいる。水俣病患者を文字通り支援する人たちのことだ。ここで言う支援とは患者運動の支援を指す。筆者が所属する相思社も一般的には支援者団体と認知されており、事実 1990 年頃までは水俣病の原因企業であるチッソ前での座り込みや裁判闘争などを支援してきた。ただ相思社は運動支援一辺

倒の支援に限界を感じ、1989年答申では運動を生活の中の一部と位置づけ、生活全体の支援を標榜してきた²。

水俣での支援者の定義は患者でない(当事者でない)という事につける。水俣生まれでも患者でなく運動に関われば支援者となる。一方地域開発では、地域住民=当事者であり、他所の地域の人=外部者と言えるだろう。もちろん何の意志もない外部者は地域に関わることもないので、地域を開発したいという意志がある人であることは言うまでもない。それらの人は外部者であり何らかの技術(参加型開発スキルを含む)を持つ専門家である場合が多い。水俣の場合は水俣病や裁判に関する知識、技術を持つ者が多い。また学生運動の経験者も多く運動をリードする経験を有している者が多かった。「知識があり、議論ができる頭の良い人」というのが水俣市民の持つ支援者へのイメージのようだ。地域の風習を守ってきた生活者にとっては、支援者は正義という理屈で共同体を破壊する者であり、近寄りたくない存在として認識されている。水俣ではそんな支援者が多くの失敗を行った。中でも多い失敗は「頭の良い支援者」が患者や地域に対して、何かを教えたり、指導したりしたことであり、外部から「正義」という概念を持ち込んだことではないだろうか。水俣生まれの民俗学者谷川健一も「大学の講壇の上から、「水俣の正義の味方」をやらせてはかないません³」と水俣市民の声を代弁している。水俣病のこと、裁判のことなど当事者が知らないことを外部者(支援者)が勉強をして教える。そのこと自体に問題はないかも知れない。それぞれが持っている資源を提供し合うという限定された意味合いの中では。しかし、その状態が常態化したり、当事者主体ということが忘れられたりすると、「教える者」が段々と権力を得ていってしまう。加えて「正義」という正論まで持ち出し、ついには進むべき道自体も指導するようになってしまう。そこにミスリードが発生する余地が生まれる。

では、外部者はどのような時に地域に介入すべきだろうか。角田字子(亜細亜大学国際関係学部准教授)は次のように述べている。「当事者の解決能力を超える場合にはじめて外部者は介入すべきである⁴」。具体的には「コミュニティの開発に必要な資源を内部で調達できないとき」と言い換えることができるとしている。私はこの点を掘り下げてみたいと思う。

1 - 3 地元学とは

1 - 3 - 1 地元学とは

まず始めに本稿でのキー概念である地元学とはどういうものか明らかにしておきたい。地元学の提唱者の吉本哲郎(当時水俣市職員)によると「地元学は、郷土史のようにただ

² 相思社存続検討委員会『水俣病センター相思社の再生を求めて(答申)』1989.10.29

³ 谷川健一『水俣再生への道』熊本日日新聞社 p.54-55.

⁴ 雨森孝悦編『開発協力』「参加型開発における外部者の役割とは」日本福祉大学 p.121

調べるだけのものではない。地元学とは、地元の人が主体になって、地元を客観的に、よその人の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することから始まり、外からの否応のない変化を受け止め、または内発的に地域の個性に照らし合わせたり、自問自答しながら考え、地域独自の生活（文化）を日常的に創り上げていく知的創造行為だということである。⁵」とある。また別の表現では「水俣病のことを外の人たちが調べてくれた。でも、住んでいる私たちはくわしくならなかった。だから、下手でもいいから自分たちで調べていこう。まず自分たちで調べて、どうしてそうなのかを考え、いまに役立てていこう。そのためにはまず自分たちで調べないとだめだ。自分たちでやるという自治する力を根本にすえないかぎり、持続的な取り組みは不可能だ」としている。1995年に「この考え方を地元で学ぶ「地元学」と名付け⁶」とある。

これら文章には多くのポイントが含まれているが、要約すると「地元の人が主体的に地域を調べる。そして自治に活かしていく」となる。つまり地元学は地域を調べる調査法であり、自治に活かすという地域作りの手法であり概念だと言える。

1 - 3 - 2 「土」と「風」の地元学

地元学には「土」と「風」の地元学がある。吉本によると「地元の人による地元学を『土の地元学』、外の人たちによる地元学を『風の地元学』⁷」としている。

吉本は「風の地元学」という表現で、外部者が地元に関わる方法を述べている。吉本は「地域のもっている力、人のもっている力を引き出すことが、外の人たちの役割」としている。具体的には「教えすぎないで、地域のもっている力、人のもっている力を引き出していくのです。引き出す方法は「驚いて、質問する」ことです。この外の人たちによる地元学を「風の地元学」といいます」としている。つまり外部者の質問によって、暗黙知を引き出し、外部者が学ぶと同時に地元の人が再認識する機会をつくる。そしてその事実に対して、外部者が新鮮な驚きを発することで、日頃当たり前すぎて価値がないと思っていたものを価値あるものへと認識させ、その積み重ねで地域への誇りを獲得していく、というプロセスの触媒としての外部者の役割があるとしている。

一方「土の地元学」とは一言で言えば「地元の人が当事者になる、住むだけの住民から地域を守り育てていく当事者への意識改革」とされている。風の地元学、外部者の役割は上記の達成が目的と言える。

1 - 3 - 2 あるもの探し

⁵ 吉本哲郎『私の地元学』NECクリエイティブ p.118

⁶ 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 p.3

⁷ 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 p.37-38.

前項で「地元学とは調査法であり、地域づくりの手法、概念である」とした。その代表的な調査法が「あるもの探し」である。ただし、あるもの探しとは調査法であると同時に地域づくりの手法でもあり、また地元学の研修方法としても用いられている。ちなみに吉本は「あるもの」とは「あるもの、あること、人」としている。

具体的にあるもの探しを行う手順は下記の通りである⁸。

調べる準備

カメラ、フィルム、A4 判用紙、色鉛筆、マジック、三色ボールペン、のり、貼り合わせた 2500 分の 1 地形図（下書き用、清書用の 2 部）、10,000 万分の 1 地形図二部、作業のできる服装

調査の準備

1. 実践者からレクチャーを受ける
2. 各自の動機づけをする（誰が、何を、何のために）
3. 調査地区の範囲を決定する（特定のモデル地域か、全域か）
4. 地元への説明をする
5. スケジュール、組織、調査メンバーと費用を確保する
6. 地元の案内人、調べる人などのチームを編成する
7. 作業場所を確保する

調べ方・まとめ方

1. 写真撮影
価値のあるものではなく、植物、食べ物、遊び、家、畑、道具、人、景観など、とにかくあるものをなんでも撮影する。できるだけ一軒の家など、まとまりを調べる。
2. 見る、聞く
地元の人に、地域での呼び方、使い方などを「これは何ですか？何と呼んでいますか？何に使いますか？」のように少なくとも三つの質問をして調べる。例えば植物の地元絵の呼び方や使い方、食べ方など。地元の人言葉で記録する。
3. 分類
地元の人といっしょに見てまわって驚いたこと、気付いたことをポストイットに書き込む。そして似たようなことがらをまとめる。
4. 絵地図にまとめる

⁸ 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 p.47-64.

模造紙を用意し、プリントした写真を分類して貼る。写真ごとに聞いたことを書き込む。全体のまとめとして驚いたこと、気付いたことを書き出す。

5. 発表して、みんなで共有する

地元の人に調べたことを発表し、絵地図は地元においていく。

調べるときの七つの心がけ

1. 現場にでかけて調べる

自分の足を運び、見て、聞いて、そこにある時事に即してものごとを調べ、考える。

2. 外の人といっしょに調べる

地元の人だけでは独りよがりになるので、外の人と一緒に調べる。そうすると日頃あたりまえと思って気付いていなかったことに気づきやすくなる。

3. 先入観を捨てて聞く

必ず地元の人に聞いて、それを書き留める。自分の経験で押し量らない。

4. 対等の立場で聞く

啓蒙したりしない。目線は同じか、低くして聞く。

5. 実際にやっていることや使っているものなどについて聞く。

意見ではなく、やっていることを聞く。

6. 話しやすい場所を選ぶ

7. あたりまえに住んでいる人が超一流の生活者だと思って聞く

聞く相手は、地元詳しい人に限定しない。ふつうに住んでいる生活者のまなざしが話に興行きや広がりをもたせていく。

上記のプロセスを経て、あるもの探しを行う。「調べ方・まとめ方」の1と2がそれにあたる。そして、3と4を地元学では共有化としている。本稿でも特別の記述がない限りあるもの探しを調べ方の1と2。共有化を3と4として用いることにしたい。

1 - 4 地元学の誕生

地元学は1994年に生まれた。吉本はこの年を「記念すべき年」と述べている。ただこの年にいきなりゼロから地元学が誕生した訳ではない。地元学には下地があった。環境創造みなま推進事業（以下、環境創造）である。環境創造は1990年から1994年まで続いた。吉本によれば「環境創造みなま推進事業は、水俣病問題の解決なくして水俣再生はありえないことを基本に、これまで避けがちであった水俣病問題を市民共通の問題としてとらえ、正面から向き合うこと、患者、市民それぞれが対話を進めること、その動きを市の内外に伝えることを目的に進められた。しかしながら、四十年近く経過していたことから、市民の心に多くのわだかまりがあり、根強い行政不信も渦巻く中で事業がス

スタートしていった⁹」とある。最終年の94年には「市民の手づくりによる企画運営が進んでいった。「やっと人前で水俣病のことを話せるようになった。スッとした、肩の荷が下りた」ことを受け、「きつかったんですね、すみませんでした、何も知らなかったもんで。あなたたちもきつかったんですね」という会話がかわせることを目標に¹⁰」とある。つまり環境創造みなまたのテーマは「患者を含む水俣市民が水俣病を語れるようになること」であることがわかる。各年度の事業を記載しておく。

1991年

1. 市民意見交換会
2. 「寄る会みなまた」、「みなまた環境考動会」の発足と活動
3. シルエット劇団まつぼっくりと地域文化の出会い - みなまた
4. 水俣湾埋立地植栽ボランティア活動
5. 水俣地域経済振興シンポジウム
6. 産業・環境および健康に関する水銀国際会議

1992年

1. 子供たちにつなぐ - 水俣を語る市民の集い
 2. 水俣病犠牲者慰霊式
 3. 国際競り舟大会
- 「環境・創造・みなまた92」
4. 第一回 水俣こころフェスティバル
 5. 第三回 世界竹会議および第三三回全国竹の大会
 6. 環境国際フォーラム
 7. 環境水俣賞授賞式
 8. 水俣国際会議

1993年

1. 市民の会理事会、ならびに市民大会
 2. 水俣の福祉を考える市民の集い
 3. 水俣病市民講座の開催
 4. 恋路島および水俣湾活用討論集会
- 「環境ふれあいインみなまた」
5. 海に向かって

⁹ 吉本哲郎『わたしの地元学』NECクリエイティブ p.94

6. 第二回 環境水俣賞授賞式
7. ふるさと環境交流集会
8. 環境再生フォーラム
9. 第二回 水俣こころフェスティバル
10. 竹人形芝居「はなれ 女おりん」の公演
11. 水俣総合物産展の実施
12. 理事会、ならびに市民大会、ならびに陳情
水俣病問題の早朝・全国解決と地域の再生・振興を推進する市民の会の活動

1994年

1. 水俣湾および埋立地の活用に関する市民討論集会
2. 水俣病犠牲者慰霊式
3. 水俣病市民講座の開催
4. 水俣病と水俣の明日を語り合う青年の夕べ
5. いま伝えたい水俣展
6. 海に向かって
7. 第三回 環境水俣賞授賞式
8. 水俣の再生を考える市民の集い
9. 第三回 水俣こころフェスティバル
10. 火のまつり

経緯を時系列で追っていくとよくわかるが、事業の初年度は水俣病の事にほとんど触れていない。わずかに水俣病の現場である水俣湾の埋め立て地での植栽活動が行われているだけである。しかし、徐々に事業全体が水俣病にも関わりをもっていくようになる。最終年度には水俣病犠牲者慰霊式を市の主催で行い、水俣市長が初めて公式に謝罪するという事に繋がっていく。またチッソ城下町と言われる水俣で「火のまつり」という市民主催で水俣病犠牲者に思いを馳せるまつりが行われるようになったのは水俣においては画期的なことである。ちなみに火のまつりは 08 年度現在も市民有志によって続けられている。環境創造のプロセスは、まず水俣市民に地域資源、あるものの再発見を通じて主体性と誇りを持たせ、水俣病へと向き合える土壌を作り、最終的に市民が水俣病を語り合えるようになることが目標と捉える事ができる。これは地元学のプロセスでもあり、地元学が目標としていることと同じである。環境創造とは地元学の実践に他ならない。いや正確に言えば地元学とは環境創造の一連の取り組みをまとめて体系化したものと言えるだろう。

¹⁰ 吉本哲郎『わたしの地元学』NEC クリエイティブ p.101

2章 JICA 研修 - 0、従来の地元学研修

この章ではまず従来の地元学研修の内容を明らかにし、その課題を探っていきたい。従来の研修パターンとして 2006 年度 JICA - NGO 連携による実践的参加型村落開発コースを受け入れた際に行った地元学研修を取り上げたい。この研修を JICA 研修 - 0 とする。JICA 研修 - 0 のスケジュールは以下のようなものであった。

2 - 1 JICA 研修 - 0 スケジュール

参加人数は研修生 14 名、11 ヶ国（ベナン、ボリビア、カンボジア、中国、ドミニカ、エクアドル、インドネシア、マラウイ、ミャンマー、スリランカ、トルコ）。同行者は長畑誠（いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク）、八木康子（JICE）、朝田くに子（ローカルジャンクション）、筒井哲朗（シャプラニール）の 4 名であった。

1月22日（月）	
09:00 ~ 11:00	I. 講義（2 時間） 「地元学あるもの探しの方法について」 講師：遠藤邦夫
11:00 ~ 13:00	II. 現場訪問&絵地図作り（4.5 時間） フィールドワーク
13:00 ~ 14:30	昼食 絵地図作り
14:30 ~ 17:00	地元学の体験ワークショップ - フィールドワーク&絵地図作り - 仲介人：沢畑亨、遠藤邦夫
1月23日（火）	
9:00 ~ 11:00	「地元学から派生した取り組みについて」 講師：市役所環境課 緒方卓也
13:00 ~ 17:00	. 現場訪問（4 時間） 地元学から派生した活動の現場訪問 場所：頭石村まるごと生活博物館で昼食&地元散策&体験 ：石飛天野茶園で昼食&地元散策&体験
1月24日（水）	
9:00 ~ 10:30	. 講義（1.5 時間） 地元学の活用 講師：吉本哲郎

10:40～12:10

研修生による発表とディスカッション（1.5時間）
地元の人たちを対象に研修生による発表と討論

2 - 2 JICA 研修 - 0 のポイント

従来の地元学研修とは概ね上記のようなものであった。つまり、地元学およびあるもの探しの講義を行う。そして実際にフィールドに行き、あるもの探しを行い、絵地図を作る。そして絵地図を地元の人前で発表し、置いてくるというものだった。一連のプロセスの中で地元学とはどういったものかを体感し、習得していくというのが地元学研修とされている。

2 - 2 - 1 地元学の背景の欠如

ここでは JICA 研修 - 0 を地元学研修の基本形とする。基本形の問題点としては、水俣病の学習が含まれていないことが挙げられる。従来、水俣では地元学研修と水俣病研修は別物と捉えられていた。水俣病は公害学習もしくは環境学習であり、地元学研修は地域づくり研修であるとされていた。必然的に地元学研修として組み立てた場合、水俣病学習は外れることとなる。筆者もまたこの点に疑問を感じてこなかった。また地元学の実践者は水俣病の専門家ではないことも多く、両者は交わることがなかった。しかし、前述の環境創造の例を見ても明らかなように、地元学は水俣病の対立、地域社会の崩壊を背景に生まれてきている。その背景である水俣病を踏まえずに地元学の本質的な理解ができるのだろうか。この課題を「地元学の背景の欠如」と表現しておく。

2 - 2 - 2 疑似体験としてのあるもの探し

次に具体的な研修内容についての課題を探っていきたい。スケジュールを見れば明らかなように従来の地元学研修ではあるもの探しを中心である。いや地元学研修イコールあるもの探しと言っても過言ではない。あるもの探しをするために地元学の講義などが組み立てられている。

では、あるもの探しとは一体どういったものなのだろうか。その内容自体は 1 - 3 - 2 で述べた。一言で言えば地域の人が主体となって地域を調べ、地域づくりに繋げていく活動である。ここではあるもの探しがどのように捉えられてきたかを考えてみたい。従来の地元学研修ではあるもの探しは地域づくり実践だと捉えられていたように思う。実際に地元学の実践と言った場合はあるもの探しを指すことが多かった。あるもの探しをすることで、地域の当たり前にあるものを発見し、そのことで地元住民が内発的に拓かれ、主体的な行動が生まれ出されるという想定だ。しかし、実際には水俣にはあるもの探しで地域が拓かれていったところはない。この点は盲点だった。前述の環境創造が終了してから水俣に

移住してきた筆者には、あるもの探しをして拓かれていった地域があるものだと思いこんでいた。しかし、後述する国際セクション内での検討を通じて、それは虚構であったことが明らかとなった。ではあるもの探しとは何なのか。国際セクションでは「あるもの探しは環境創造での一連の取り組みをまとめた疑似体験である¹¹」と結論づけた。そして検討を続けていく中で、あるもの探しには地元学のエッセンスがふんだんに盛り込まれていることに気付いた。あるもの探しを体験することで、地元学のエッセンスが体感できるという非常に優れた疑似体験と捉える事ができる。ただし、あるもの探しに含まれるエッセンスは表層にあるものから深層にあるものまでいくつかの段階がある。国際セクションではあるもの探しという疑似体験から地元学のエッセンスを表層から深層まで抽出することが当面の目標と設定された。

ここで一つ注意しておきたいのは、「疑似体験としてのあるもの探し」とは実践としてのあるもの探しを否定するわけではないということだ。あるもの探しは地域調査の手法として実践的であろうし、地域づくりの概念としても有効である可能性もある。しかし、水俣で行う場合には形式化しており、研修用となっている側面が強い。そして研修では地元学のエッセンスの表層を理解するものだと規定すると、あるもの探しを研修と行っただけで、実践で調査法や地域づくりに活用するには難しい。なぜなら実践で使うための手法や概念は深層に隠されているからだ。

2 - 2 - 3 象徴としての「絵地図を持ち出さない」という行為

あるもの探しが形式化、研修化してしまっているという事例を、あるもの探しでの成果物である絵地図を置いてくるという行為に見ることができる。絵地図を置いてくる理由は「知の植民地にならない」「調べた人しか詳しくならない」という地元学のコンセプトから来ている。今まで水俣には多くの専門家がやって来た。医学、社会学、法学、哲学、映画、写真、演劇、思想家等々。それぞれに水俣や水俣病を調査していった。専門家は水俣で知識を得たが、地元の人には詳しくならなかった。表現を変えれば知的財産を奪われているだけであり、この状態を吉本は「知の植民地」と称した。地元学ではこれらの反省を踏まえ、調べた成果は持ち出さずその地域に置いてくることをルールとしている。その象徴として絵地図を地域に置いていく。外部者はせいぜい写真で記録するぐらいに留め、絵地図はいつでも地元の人が活用できるよう公民館などに置いてくることになっている

しかし、実際には地元で絵地図が活用されている例はほとんどない。あるもの探しの経験が少なかった時期には活用されていたかも知れないが、年に何回も行う現在では絵地図は公民館の片隅に積み重ねられているというのが実態である。実践として捉えた場合、置いてくる行為は自己満足以外の何物でもない。地元の人に活用される可能性がほとんどな

¹¹ 国際セクション 『国際セクション議事録 8.22』 2007

いからだ。ただし研修としては現在もなお生きている行為だと言える。地域住民が主体となって調べるといふ地元学のコンセプトを表現しており、誰のための地元学かを考える上では有益である。研修として有益なのだから絵地図を置いてくるという行為を問題にする気はない。問題は研修担当者や研修を受ける物が研修と実践を混同していることにある。実際、筆者は研修実施者でありながら上記の区別が明確ではなかった。地元学「研修」と言いながら意識では「あるもの探しの実践を行い、その実践から地元学を学ぶ」という意識であった。研修担当者がこのような理解であれば、研修を受ける者が混同するのは必然と言えよう。

2 - 3 JICA 研修 - 0 での課題

ここで JICA 研修 - 0 での課題、つまり従来の地元学研修での課題を整理しておきたい。

2 - 3 - 1 あるもの探しの課題

現在、地元学研修の多くは「村丸ごと生活博物館」で行われる。なぜなら村丸ごと生活博物館は地元学の成功地域とされているからだ。08 年現在、頭石、大川、久木野、越小場の 4 地区が村丸ごと生活博物館の指定地域となっている。07 年の頭石への訪問人数は 457 人、42 件¹²となっている。十日に一件以上のハイペースだ。4 地区合計では、1,150 人、100 件となっている。水俣市における教育旅行受け入れ数の約 6 分の 1 にもなる¹³。村丸ごと生活博物館では「村めぐり」というプランがある。地域に長年住んでいる人が「生活学芸員」として村を案内する。村丸ごと生活博物館の HP では次のように紹介されている。

「一人で歩くとなんでもない村です。しかし、村人の案内とみなさんの問いや驚きが変わると、数え切れない生活の知恵や言い伝えなど、今まで隠れていた村の生活文化や物に眠っていた物語が引き出されていきます¹⁴」

村丸ごと生活博物館の看板プランである「村めぐり」。HP に紹介されているその内容はほぼあるもの探しと同じである。つまり頭石の人たち、特に生活学芸員は村めぐりやあるもの探しを頻繁に行うことになる。結果、生活にあるものや生活文化、人を探すはずが、お堂や地域の由来の石などを巡る名所巡りになってしまっている。あるもの探しのはずが、実際にはあるものが固定されてしまっているのだ。この現象は前述したように水俣でのあるもの探しの位置づけが研修なのか実践なのか曖昧な事に起因していると考えられる。水

¹² 水俣市企画課元気づくり推進室『水俣市元気な村づくり外部対応記録』2008

¹³ 水俣教育旅行プランニング『水俣市における教育旅行受け入れの推移・水俣市調べ』

¹⁴ http://www.minamatacity.jp/related_group/muramaru_group/02_mura-maru_an-nai.htm# 2009/02/01

侯では「あるもの探しは実践。実践を研修として用いているだけ」と思われている。しかし、水侯で行うあるもの探しは実践とは言えない。なぜなら地域の人が調べるのではなく、地域の人がすでに知っている場所を外部者に案内するだけだからだ。そこに地元の人のおづきや再発見はない。確かにその場所はいわゆる従来の価値観での観光スポットではない。仮に御堂に行ったとしても、整備された観光地ではなく、地方ならどこにでもあるような御堂だ。この点は地域に当たり前にあるものに光をあてていると言っても良い。しかし、そのことだけを指して実践とは言えない。実践でなければ研修となるが、何の研修かはあまり明確に意識されていない。地元の人に学びがない以上、外部者の研修、風の地元学の研修ということにしかならない。そう考えると、地元の人プラン通りではなく、どうやって「あるもの」に目を向け、地元の人に質問をしていくか、外部者がそこを練習するという研修と組み立てることができる。

水侯におけるあるもの探しは地域づくりの実践でなく研修であることを述べてきた。実践だと誤解しているから、参加者に適応したプログラムになっているかどうか吟味なしに行われているのではないか。そうだとすると上記の点は問題が多い。

ただし、水侯におけるあるもの探しにも実践的な側面がないわけではない。地域づくりの面で有益だと感じられるのは、出会いが生まれることである。村丸ごと生活博物館やあるもの探しを通じて前述のようにたくさんの外部者がやってくる。JICA 研修員だけでなく、高校の修学旅行生なども多い。何の特徴もない村、水侯の人でさえほとんど知らなかった村に多くの人々がやってくる。それも地域に住んでいる人の生活や文化、そして人に興味を持って会いに来るのだ。この事実がもたらすインパクトは大きい。異質との出会いによって頭石の人たちはそれこそ元気になり、日々の生活を楽しんでいる。この点は現実として有益である。しかし、研修の内容がもたらしている訳ではないことは押さえておく必要がある。

2 - 3 - 2 JICA 研修 - 0 参加者の感想

JICA 研修員によるふりかえりでは、地元学研修について研修員の 80%以上が高い評価をつけており、「コミュニティアクションのサイクルとして、外部者とコミュニティの役割を知ることができた¹⁵」という意見が多数あった。従来の地元学でも最低限伝えたいことは伝わっていることが伺える。しかし、研修実施者としてはどうも上滑りしている感が拭えなかった。なぜなら JICA 研修員たちは日本人と違い農村地域での生活体験や知識を持っているもの多く、また水侯に来るまでに JICA 大阪にて外部者の役割の研修を受けていることもあり、ある意味一を聞いて十を知る状態とも言える。こちら側の表現不足も研修員の能力によって補われている感があった。

¹⁵ 関西 NGO 協議会 『JICA 研修ふりかえり』 07.2.14

一方、ファシリテーターの長畑氏より「地元学が生まれた背景の部分（水俣病とそれによる地域の崩壊）を伝えるのが難しかった¹⁶」とのコメントがあった。これは研修実施者としても感じていたことであった。水俣病を背景にして地元学は生まれたのにそのことを伝えずに地元学は伝わるのだから、と。前述した「地元学の背景の欠如」である。確信はなかったが、水俣病の説明がなければ地元学の本質は伝わらないのではと従来の地元学研修の検証を通じて思い始めるようになった。

2 - 4 隠されていた実践編地元学

最後に JICA 研修 - 0 で学べることを整理してみたい。JICA 研修 - 0 では大まかな地元学のコンセプトを学ぶことができる。例えば「ないものねだりではなく、あるもの探しを」や「地域主体の調査、地域づくり」などのコンセプトである。これらは地元学のキー概念と言える最も重要な点である。それらを学ぶためのシミュレーションとしてあるもの探しがある。絵地図を置いてくるという表現もその一つと言える。今までの水俣病や地域政策の事例を見れば明らかだが、外部者主体の調査、開発、外からの資源の持ち込みが常態であった状況からすれば、上記の学びだけでも大きな意味がある。そして水俣にはその考えによって元気になった地域や人がいるからなお説得力を増す。しかし、上記はいわば入門編地元学であり、地元学の入り口にしか過ぎない。上記を学んで自分の地域に帰っても、重要なコンセプトだけでは自分たちの地域で実践することは容易でない。前述した象徴的な事例として絵地図を置いていく行為からもわかるように国際セクションであるもの探しは地元学を学ぶための疑似体験、シミュレーションであると結論づけた所以である。また現状の研修では地元学のキー概念も表層的な理解になってしまう。入門編をより良く理解するためにもその先になる実践編地元学が必要である。

当初の仮説ではカメラやすぐにプリントするなど行為のインパクトが大きすぎて、コンセプトの理解に繋がらないのではという仮説だったが、実はそれだけではなかった。今までやってきた地元学は実践だと思い込んでいたが研修に過ぎなかった。そして、その研修が包括している内容は地元学の基礎的で大事なコンセプトを中心として入門編地元学と言えるものであった。入門編にすぎなかったからこそ実践に辿りつけなかったのだ。他ならぬ筆者も地元学での学びを活かして、水俣や水俣病支援で役立てていこうとしたが適わなかった。実際にどうやる、という段階になると途端に立ち往生してしまう。今まで水俣で地元学を学んできた研修員たちも同じではなかっただろうか。実践編地元学を学んでいないのだから当然である。そこに国際セクションでは気づき、実践編地元学を明らかにしようという取り組みが始まった。それが JICA 研修 1 ~ 3 にあたる。ただしこの時点では実践編地元学という認識はなく、より良く地元学を伝えていきたいという曖昧な意識でしか

¹⁶ 関西 NGO 協議会 『JICA 研修ふりかえり』 07.2.14

なかった。入門編地元学への本質的な理解が足りないからこそ実践で役に立たないのだと考えていた。これからその経過と少しずつ明らかになった入門編地元学と実践編地元学について述べていきたい。

3章 JICA 研修 - 1 地元学探求の始まり

今までの経緯を踏まえ、相思社内に国際セクションを立ち上げた。メンバーは相思社職員の遠藤邦夫、芳田弓生希、そしてチーフとしての筆者、計3名。遠藤は環境創造以前から水俣におり、地元学を作ってきた中心メンバーの一人でもある。芳田は国際開発 NGO の職員経験があり、英語も堪能である。検討は筆者が司会進行を務め、筆者の疑問、提案を遠藤の経験で受け、その答えを3人で揉んでいくというスタイルで行った。その最初の実践の場が JICA 研修 - 1 だった。

3 - 1 JICA 研修 - 1 での取り組み、スケジュール

実践編地元学への取り組みの第一弾は 2007 年度 JICA-NGO 連携による実践的参加型村落開発コースの受け入れだった。全体は 11 月 5 日 - 12 月 22 日の約 6 週間で JICA 大阪にて「外部者の役割」を学ぶ。ファシリテーターは JICA 研修 - 0 のファシリテーターでもある長畑誠氏。水俣での研修は 11 月 21 日 ~ 23 日の 3 日間だった。研修員は 13 名、10 ヶ国（ドミニカ共和国、エチオピア、インド、インドネシア、モザンビーク、ネパール、ニジェール、パプアニューギニア、フィリピン、イエメン）であった。

スケジュールは以下のように組んだ。

11月21日(水)	
9:00~10:00 場所: 相思社 移動はバス	水俣病歴史考証館見学 - 坂西卓郎 (相思社併設の展示館・猫小屋・仕切網など実物多数) 地元学は水俣病の問題を前提に生まれた。そのマイナスをプラスに転換していく取り組みである。ゆえに水俣病を踏まえずして地元学の本質は理解できない。考証館見学を通じて、水俣病の差別、偏見などがどう生まれ、どう問題となったのかを学ぶ。
10:40~12:00 場所: 茂道	杉本肇さんの語り(水俣病患者家族)聞き手: 遠藤 肇さんは、患者多発地域の茂道の出身であり、生まれた時から

<p>14:00~15:30 場所：相思社</p>	<p>水俣病と付き合いざるを得ない人生を送ってきた。その重圧から一度は水俣を離れたが、水俣で生きていく決心をして戻ってきた。聞き手遠藤が、水俣病の差別、偏見がどう人生に影響を与えたか、また今なぜ水俣に戻ってきたか。肇さんの半生を通じて、水俣病の偏見、差別のケーススタディを行う。</p> <p>遠藤邦夫レクチャー「どのようにして地元学は生まれたか」 ～水俣病を背景として～</p> <p>地元学は長畑氏からレクチャーを受けた。水俣病の差別も勉強した、肇さんの話も聞いた。ここで両者を繋げて、地元学の本質的な理解を深めてもらう。地元学=あるもの探しではなく、その考え方、思想にこそ学ぶべきポイントがある。水俣病から始まる地元学の歴史やその成果などの実際を学ぶ。</p>
<p>16:00~17:30 場所：相思社</p>	<p>ワーク「あなたの村、私の村」 - 坂西卓郎 ゲスト：富吉氏（市役所）</p> <p>それぞれの活動地域の自己紹介をしてもらう。</p> <p>わかりやすく視覚化するために3つキーワードを挙げ、それをもとに説明してもらう。ここで地域の何を説明するかでその研修生の地域への視点が見える。このワークの狙いはこれから地元学のワークをする上で、まず自分の地域をことと繋げて考えること。さらに自分の立ち位置や価値観を知ることである。村の課題ばかりに目が行っていないか。村の当たり前になるプラス面をどう見ているか。それぞれの現状認識を語ってもらう。</p>

<p>11月22日(木)</p>	
<p>9:00~9:30</p>	<p>あるもの探しレクチャー 講師：遠藤邦夫</p>
<p>10:00~12:00 場所：頭石</p>	<p>あるもの探し - 遠藤邦夫、坂西卓郎、長畑誠氏 案内人 - 勝目豊さん、他2名</p> <p>あるもの探しは一つの疑似体験である。あるもの探しをやることだけで地域づくりはできないが、そのエッセンスはあるもの探しに凝縮されている。あるもの探しをそれぞれに地域でやるというより</p>

<p>12:00 ~ 13:30</p>	<p>は、あるもの探しを通じて地元学の本質を学ぶきっかけとする。</p> <p>昼食（頭石） 村の女性による手作り郷土料理 勝目さん及び村の人との交流、インタビュー時間、散策も含む 勝目さんと村の女性数名が参加予定</p>
<p>13:30 ~ 15:15 場所；頭石公民館</p>	<p>共有化 - 遠藤邦夫（ポストイット、模造紙使用） あるもの探しを通じて発見したことをシェア、分類する。 作業はグループ毎に行い、簡単に発表をしてもらう。</p>
<p>15:30 ~ 17:00 場所；頭石公民館</p>	<p>ディスカッション テーマ1：地元学における外部者の役割 テーマ2：地元の人がエンパワーされるプロセスとは？ テーマ3：それぞれの地域でどう実践するか？</p> <p>通常であれば絵地図をつくり、発表する時間だが、今回は意図的にやらない。なぜなら、絵地図づくりを行うと手法に特化され、地元学の本質が覆い隠されてしまう。またカメラがない、地図がないといった現実的な不都合も目についてしまう。絵地図は地元の人为主体的な参加があってこそ役に立つものであり、今回のような研修で行ってもアクティビティにしかならない。よって、今回は「地元学の本質を知る」きっかけの一つとしてあるもの探しを行い、それを体験してみて実際にどうだったのかをシェアし、またそれぞれの地域でどう実践できるかディスカッションする。</p>

<p>11月23日（金）</p>	
<p>9:00 ~ 10:00 場所：相思社</p>	<p>「水俣病の水俣から地域再生へ相思社の果たした役割」遠藤邦夫 相思社はそもそも外部者集団であり、水俣病の支援から始まり現在では地域づくりを行うNGOである。相思社の活動の変遷やその果たしてきた役割を通じて、個人としての外部者の役割、組織としての外部者の役割、そのインパクトについて学ぶ。</p>
<p>10:30 ~ 12:00</p>	<p>ふりかえり - 長畑誠氏</p>

場所：相思社	ワーク「私の村、あなたの村」で行った3つのキーワードについて、今の時点でのキーワードを考え、比較する。 2～3つのグループに分かれてワーク、及び発表。
--------	--

3 - 2 JICA 研修 - 1での狙い、ポイント

まずカメラを使ったことでないもの探しをさせてしまった反省を踏まえ、カメラを使わずに地元学が組み立てられないか検討した。当時の会議録から一部を抜粋する。

「海外からの来訪者に従来のやり方での地元学研修は有効でない。なぜならあるもの探しを一回学んでも現地ではできないからだ。上記を前提に新しい研修スタイルを構築する。その方向性はあるもの探しの手法を伝えることにはこだわらない。カメラの使用も中止する。その代わりに地元学で伝えたいポイントを抜き出して焦点を当てる。それをもとに研修を組み立てる。具体的には「地域資源の再発見」「ないものねだりをしない」などどの地域でも汎用性があり、かつ内容の深いポイントを水俣病の話と組み合わせる。¹⁷⁾ (07.8.22 坂西)

上記が JICA 研修 - 1での研修方針であった。今から思えば、実践編地元学など全く意識がなく、むしろ具体的な手法よりも、地元学が大切にしているキー概念を伝えることを重視している。つまり入門編地元学を従来のあるもの探しよりも効果的に伝える方法を模索している段階だと言える。以下に具体的な取り組みを記述する。

3 - 2 - 1 取り組みその1 水俣病歴史考証館見学、水俣病患者の話

具体的には、まず「地元学の背景としての水俣病」を重視した。前述したように今まで地元学研修で、水俣病のことを踏まえることはあまりしてこなかった。水俣病と地元学は別個のテーマと捉えていたからだ。しかし、長畑氏の指摘にもあるように地元学が生まれた背景には水俣病の対立があり、それを理解せずには地元学の本質は理解できないとして、水俣病歴史考証館見学と水俣病患者の話を組み込んだ。

研修の最初に相思社が運営している水俣病歴史考証館で水俣病の歴史のレクチャーを行った。ここで重視したのは、水俣病の身体的な被害よりも社会的な被害、つまり水俣病による地域社会の対立、崩壊に焦点を当て、水俣病患者への偏見、差別などの説明に時間をかけた。地元学が生まれる前に水俣がどういう状況だったのか、地元学が目指すゴールを理解してもらうための準備の一つである。また水俣病が近代化、物質的な豊かさを希求した結果であることも押さえた。行き過ぎた発展へのアンチテーゼとしての側面も地元学にはあるからだ。

¹⁷⁾ 国際セクション『国際セクション議事録 8.22』2007

杉本肇氏はスケジュールに書いてあるように水俣病の激震地に生まれ育ち、水俣病による差別に苦しんできた。その苦しみゆえ、一度は水俣を離れたが、最終的には水俣に戻ってきた。東京での暮らしを捨て、何もない水俣に戻ってきた。彼を引き戻したのは、幼少時から親しんできた不知火海だった。考証館で説明した水俣の対立を、杉本氏の具体的な半生からケーススタディとして学んだ。

3 - 2 - 2 取り組みその2 ワーク「私の村、あなたの村」

水俣でこの種のワークをやることはあまりない。なぜなら水俣には水俣病でも地元学でも常に現場がそこにあり、ワークという疑似体験をする必要性が薄いからだ。相思社でもワークはほとんどしてこなかったが、今回は取り入れてみた。それは地元学を実践的な学びにするためには、常に自分の地域のことを頭にイメージしてもらふ必要があると考えたからだった。具体的には、まず何も説明せずに研修員たちの地域の紹介をしてもらう。わかりやすいように3つのキーワードをあげもらう。そのキーワードにポジティブなことを書くか、ネガティブなことを書くか、現状での研修員の地域へのまなざしを表現してもらう。必要であれば質問として地域をどう捉えているか確認する。そして、研修の最後にもう一度、地域を表現してもらい、どう変化しているかを体感してもらった。

3 - 2 - 3 取り組みその3 カメラを使わない

あるもの探しでは、1 - 3 - 2で述べたように準備する道具として、カメラ、地図、ノート、鉛筆などがある。まず地域を歩く時に10,000万分の1の地図を見ながらどこを歩いたかを確認する。そして、目につくものを片端からカメラで撮る。案内人に質問をして、答えを全てメモする。カメラで撮った写真は写真屋に走ってすぐに現像してくるか、最近ではデジカメなのでプリンターとパソコンを持ち込み全て印刷するというを行う。その写真を使って絵地図を作る。撮った写真は全て地域にあるものであることは間違いがない。それらを並べて貼るだけでも相当のインパクトがある。しかし、このやり方をしてしまうと、どうしても日本での特別な研修となってしまう、自分の地域でやるイメージを得るのが難しいのではないだろうか、と感じていた。その理由としては、まずカメラの存在がある。仮にカメラがある地域でも、写真を撮って絵地図作成までの1~2時間で現像して現場にもってこられる国はそれほど多くはない。首都のある都市でも難しいと思われ、ましてや地域開発の現場で同じ手法でやるのは現実的とは言えない。実際に吉本がベトナムで行ったあるもの探しの際には現像が翌日になり、かつ全ての写真が印刷されておらず、勝手に良いものだけを選んで現像されており「困ってしまいました¹⁸」と吉本は述べている。また一万分の一の地図も同様で、農村のすみずみまで地図が整備されている国はそれ

¹⁸ 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 p.148

ほど多くはない。よって、従来の手法にこだわらずに「あるもの探しをそれぞれの地域でやる」ということよりも「あるもの探しを通じて地元学の本質を学ぶきっかけ」と位置づけた。あるもの探しの成果である絵地図も作成せず、その分の時間をあるもの探しをしてみても実際にどうだったのか、またそれぞれの地域でどう実践できるかをディスカッションした。

3 - 3 JICA 研修 - 1での成果

JICA 研修 - 1では今までの研修スタイルを自明のものとしてせず、一から見直しをしたことに意義があった。しかし、第一歩を踏み出したことは大きかったが、そのことによりエネルギーを使い果たし事後評価がきちんとできなかった。当時の国際セクションでの研修後の記録には「初めての試みだった。半分成功、半分課題ありということだろうか。方向性は悪くなかったと思う。が、時間配分、表現の方法で課題があった。(中略)JICA 研修員と相思社職員の「出会い」としても機能する可能性も見えた。(中略)課題半分は地元学提唱者の吉本氏の起用、テーマの細分化、表現の工夫としておく¹⁹」とある。方向性を見出したところで満足しており、反省点としては具体的な時間配分や事前打ち合わせなどコーディネーション部分に偏っていることが伺える。それらを指して「表現の工夫」としている。この言い回しから内容や方向性への課題は見いだせていないことがわかる。ただ課題に「テーマの細分化」がある点は大きい。従来の研修がアバウトなものであり、今回は水俣病から地元学へ、などの流れを重視してプログラムを組み立てたが、それでも各プログラムで色んなコンセプトを同時に伝えるという構成になった。その反省としてテーマを細分化するの必要を感じていたのだろう。結果的にはテーマを細分化するという作業で、図らずも地元学の表層から深層へと進むことに繋がっていった。

上記を踏まえて結論を述べると、JICA 研修 - 1では国際セクション内においても地元学への理解はさほど深まっておらず表層に留まっている。しかし、方向性はある程度見出ししており、また「テーマを細分化」するという今後の道のりにおいて重要なきっかけを得ていると言える。このきっかけは入門編、実践編地元学への理解を深めていく重要な方法の一つになる。

3 - 4 なぜ地元学は水俣病を背景としているのか

表題の答えは一言で言えば「水俣病による対立、患者への偏見などによる地域の崩壊があって地元学は生まれた」からだ。地域の崩壊は水俣市民が地元への誇りを失う結果へとつながった。だからこそ地元学では地域の誇りを取り戻すことを目的としている、のだと思ってきた。いや入門編地元学の理解としては間違っていなかっただろう。しかし、上記

¹⁹ 国際セクション 『国際セクション 議事録 12.8』 2007

を理解しただけでは何かを実践はできない。JICA 研修 - 1 当時は国際セッションでの理解は上記のようなものでしかなかった。しかし、実践編での理解では言えば、水俣病による対立、というのが「課題」として設定され、その解決方法として地元学が生まれたと捉えることができる。「地域への誇りを取り戻す」とは、「課題」への解決策とすることができるのではないだろうか。この点は 5 - 4 で再度検証したい。

4 章 JICA 研修 - 2 見えてきた実践編地元学

2008 年 7 月 18 日（金）～19（土）の 2 日間、JICA 筑波による集団研修「持続的農村開発」コースを受け入れた。参加者は 9 名、6 ケ国（ガーナ、インドネシア、ケニア、マラウイ、南アフリカ共和国、ザンビア）。全体の研修は 08 年 2 月～12 月の 10 カ月で、JICA 筑波と筑波大学の協働による農村開発課題解決への貢献、修士号の取得を目的としている。研修目標としては「アジア・アフリカ諸国において農村開発分野で従事する実務者が持続的農村開発に関する知識 / 手法 / 技術の習得を通して立案 / 実施する業務改善計画の経験から課題解決に有効なアプローチ方法を提案する。」²⁰とある。水俣での地元学研修は「日本の事例学習」であり、「持続的農村開発」として位置づけられている。ファシリテーターは長畑誠氏だった。

4 - 1 JICA 研修 - 2 のスケジュール

JICA 研修 - 2 では JICA 研修 - 1 での成果、反省を元に下記のようなスケジュールを組んだ。

7 月 1 8 日（金）	
9 : 0 0 ~ 1 0 : 0 0 場所：相思社	水俣病歴史考証館見学 - 坂西卓郎 地元学は水俣病の問題を前提に生まれた。そのマイナスをプラスに転換していく取り組みである。ゆえに水俣病を踏まえずして地元学の本質は理解できない。考証館見学で水俣病の差別、偏見がどう生まれ、どう問題となったのかを学ぶ。
1 0 : 0 0 ~ 1 0 : 3 0 場所：相思社	ビデオおよびワーク「私の村、あなたの村」の導入 Minamatas` s Message to the world 17:44 水俣の雰囲気などを掴んでもらうために映像を入れる。また

²⁰ JICA 筑波 『平成 19 年度集団研修「持続的農村開発」コース』実施要領

<p>10:45~12:00 場所：相思社</p>	<p>ワークの導入部分で3つのキーワードだけ最初に考えてもらう。狙いは地元学の話聞いてない状態で、自分の地域を捉えてもらうことである。</p> <p>小柳さんの語り（ガソリンスタンド経営者）聞き手：遠藤 小柳さんは水俣市内でガソリンスタンドを経営している。元水俣青年会議所の会長でもある。また水俣病50年事業など水俣病やまち作りに関わりながら、水俣の問題点を鋭く指摘する。聞き手遠藤が、水俣における水俣病の存在、まちの人にどう捉えられており、どこに問題点があるか。小柳さんの語りを通じて、水俣病の偏見、差別のケーススタディを行う。</p>
<p>14:00~15:30 場所：相思社</p>	<p>沢畑亨（愛林館館長）講義、坂西同行 沢畑さんから久木野での愛林館の活動について聞く。地元学を学ぶにあたって、概要ではなく久木野という地域にフォーカスして学びを得る。</p>
<p>16:30~17:30 場所：相思社</p>	<p>ワーク「あなたの村、私の村」 - 坂西卓郎 それぞれの活動地域の自己紹介をしてもらう。わかりやすく視覚化するために3つキーワードを挙げ、それをもとに説明してもらう。ここで地域の何を説明するかでその研修生の地域への視点が見える。このワークの狙いはこれから地元学のワークをする上で、まず自分の地域を繋げて考えること。さらに自分の立ち位置や価値観を知ることである。村の課題ばかりに目が行っていないか。村の当たり前になるプラス面をどう見ているか。それぞれの現状認識を語ってもらう。</p>
<p>17:30~18:00 場所：相思社</p>	<p>遠藤邦夫講話「ごみ分別の意味」 水俣病の差別、地元学の概要は学んだ。ここで両者を繋げて、地元学の本質的な理解を深めてもらう。地元学=あるもの探しではなく、その考え方、思想にこそ学ぶべきポイントがある。ごみ分別がもたらしたものから地元学を考える。</p>

7月19日(土)	
9:00 ~ 9:30 場所:大川公民館	あるもの探しレクチャー 講師:遠藤邦夫 主にあるもの探しの手法などを簡単に
10:00 ~ 12:00 場所:大川公民館	あるもの探し - 遠藤邦夫、長畑氏 案内人 - 大川より2名 あるもの探しは一つの疑似体験である。あるもの探しをやることだけで地域づくりはできないが、そのエッセンスはあるもの探しに凝縮されている。あるもの探しをそれぞれに地域でやるというよりは、あるもの探しを通じて地元学の本質を学ぶきっかけとする。
12:00 ~ 13:30 場所:大川公民館	昼食 (大川公民館) 村の女性による手作り郷土料理
13:30 ~ 15:00 場所:大川公民館	インタビューの時間
15:30 ~ 17:30 場所:大川公民館	共有化 - 遠藤邦夫 (ポストイット、模造紙使用) あるもの探しを通じて発見したことをシェア、分類する。 作業はグループ毎に行い、簡単に発表をしてもらう。

4 - 2 JICA 研修 - 2での取り組み

JICA 研修 - 2では、JICA 研修 - 1を軸により地元学への理解を深め表現することがテーマだった。スケジュールも3日から2日になっており、より研修内容をシャープにする必要に迫られたし、JICA 研修 - 1で見えた「テーマの細分化」も課題であった。上記を踏まえて組んだ JICA 研修 - 2での特色は水俣病と地元学の融合にあった。地元学の背景としての水俣病を伝えるという JICA 研修 - 1での目的を達成するのはそれほど難しくはなかった。相思社の職員はそもそも水俣病の専門家だからだ。しかし、地元学と水俣病の関連性を伝えるのは慣れていなかった。JICA 研修 - 1ではその融合を相思社職員遠藤の話で行おうと思ったが、課題が整理されておらず十二分にはうまくいかなかった。原因を国際セッションではテーマを詰め込みすぎて個々の伝えたいことを丁寧に伝えきれなかったと分析した。また伝えたいことをそのまま伝えるのではなく、水俣の具体的な事例

に沿って伝えようと考えた。そこで水俣病と地元学が融合した具体的な事例として水俣における資源ごみの22分別を取り上げ、地元学のエッセンスを伝えようとした。

4 - 2 - 1 地域づくりに貢献したごみ分別

水俣市は1993年からごみの分別を始めた。当初は20分別から始まり、最大24分別、現在は22分別(08年度)となっている。水俣市の市報に「水俣病により健康と環境の双方で大変大きな被害を体験した水俣市は、このことを教訓として、ごみの分別をはじめISO14001の取得など、環境の先進地としてこれまでたくさんの環境保全に関する取り組みを行ってきました²¹」とあるように、ごみ分別の目的はごみの総量を減らし、環境負荷を軽減させることであった。

表1：水俣市のごみ処理量の推移と一人あたりの排出量(単位 t)

	可燃	生ごみ	埋立 不燃	資源	総量	リサイ クル率	人口	一人あ たり	埋立 残渣
1991	7,700	0	3,226	0	10,926	0.0%	34,510	3.16	4,013
1993	7,462	0	958	854	9,274	9.2%	33,842	3.65	1,792
1995	7,061	0	578	1513	9,152	16.5%	33,188	3.63	1,319
1997	7,616	0	741	1571	9,928	15.8%	32,539	3.28	1,463
1999	8,660	0	843	1869	11,372	16.4%	31,785	2.80	2,205
2001	8,190	0	361	2197	10,748	20.4%	31,165	2.90	2,005
2003	5,231	1,527	282	2371	9,411	41.4%	30,257	3.22	857
2005	5,068	1,493	301	2285	9,147	41.3%	29,457	3.22	751
2007	4,797	1,287	320	2176	8,580	40.4%	28,761	3.35	771

(水俣市環境クリーンセンター『平成19年度水俣市ごみの処理状況』を元に筆者作成)

しかし、表1にあるように確かにごみの総量は下降傾向を辿っているが、人口一人あたりで見るとほぼ横ばいである。つまりごみ総量低下の原因はごみ分別導入でなく、人口減少によるものとも言える。また分別されたものは、主には水俣市内にあるエコタウンでリサイクルされている。ごみ分別は最終処分場の延命、つまり焼却灰、埋立残渣の減少という意味では表にあるように大きな成果を上げているが、リサイクル時などのエネルギーを考慮すると効果的に環境負荷を軽減させたとは言えない。つまり水俣市の言うように環境保全の取り組みとしては残念ながら課題が残っている。

²¹ 水俣市総務課「広報みなまた」2009年2月1月号 p.3

だが、ごみ分別は水俣に大きな成果をもたらした。それは環境負荷の軽減よりも地域づくりにおいてだった。水俣市民は水俣病ゆえに自らの出身地域に誇りが持てなかった。象徴的な事象として出身地を言えないなどの問題があった。しかし、ごみ分別を始めたことで、ごみ分別を見学するために日本中、いや世界各地からも視察や見学が訪れるようになってきた。ごみ分別は月一回地域で集まりみんなで分けている。だから見学もその現場に来る。すると直接市民の人が見学者と相対することになる。見学者は水俣の多分別収集、市民の取り組みに感心し「すばらしい」と称賛して帰っていく。水俣市民は直接外部者から良い評価を受けることになった。これは水俣市民にとっては初めての出来事であった。今まで水俣に来る外部者は水俣の暗部である水俣病のことばかりを調べていった。地域の人にとって嬉しいことではなかった。それと正反対のことがごみ分別によりおこった。結果としてごみ分別によって水俣市民は誇りを取り戻していく。その事がきっかけで水俣市民は水俣病に向き合っていくことが可能となった。このことは前述したように環境創造での事業の経緯にも表れている。

つまり水俣病問題の解決のために地域に「あるもの」であるごみを分別するということで、市民が誇りを得る。このプロセスはまさに地元学そのものだと言える。ごみ分別を地元学の枠組みで捉えると、あるものとしての「ごみ」の存在と「水俣病の経験」がある。吉本はあるものを「プラスのあるもの」としてよそにはないもの、どこにでもあるものと「マイナスのあるもの」困っているもの、余っているもの、捨ててあるものとに分けている。特徴で分けているが、どちらもあるものであることには変わりがないとしている。「ごみ」は困っているものであり捨てているもの。「水俣病の経験」はよそにないものという意味では「プラスのあるもの」だが同時に困っているものという意味ではこれ以上ないくらい「マイナスのあるもの」と言える。資源ごみの 22 分別はこの 2 つを組み合わせで生まれた「新しいもの」である。まさにごみ分別とは「あるものとあるものを組み合わせで新しいものを作る」というプロセスである。そしてその事により地域の人が誇りを取り戻し、地域として水俣病と向き合う素地が作られていく。遠藤はこの現象を「水俣の住民が水俣病と向き合うためには、批判されるばかりの存在でいてはそのスタンスを形成しようがない。自分自身を見直す余裕がなければ、他者の痛みを分かろうとすることはできないものだ。資源ごみの分別によって少し誇りを取り戻した人々は、水俣病被害者の声を聞く余裕が少しだけできた²²」と表現している。地元学が課題としていた水俣病による地域の崩壊が地元学の手法を生かした資源ごみの分別により鮮やかに解決への道を歩み出したと言える。水俣ではこのプロセスを「もやい直し」と表現している。

加えて水俣では水俣病により地域の協働作業も細っていた。地域内での対立が影響していたのだ。それらの積み重ねで地域間での会話も減少していた。しかし、ごみ分別が始

まり定期的に集まることによって、井戸端会議ならぬゴミ端会議が生まれるようになった。地域での会話が復活したのだ。水俣病によって対立していた地域社会の解決のための糸口もまたごみ分別をきっかけに生まれた。またごみ分別を導入する過程から地元学のアプローチを抽出することもできる。水俣市では当初、ごみ分別の導入に関して市民からの激しい批判にあった。「ごみを分けるのは市の仕事。なんで自分たちがやらんばんと。それなら裏山に捨てる」と言った意見が続出した。水俣市はごみ分別を導入するにあたって市で約 300 回もの説明会を開いた。しかし、当初は上記のような批判に会い、その度に市職員は打ちのめされて帰って行ったという。そこで吉本は説明会を行う地域出身の職員を送り込んだ。そうすると「誰々さんの息子があれだけ言うんやけん、一度やってみっか」という事になりとりあえず始めることを了承したというのだ。この例を手放しで称賛する訳にはいかないが、都市生活者には縁のない地縁の存在を認識するには役に立つと言える。

JICA 研修 - 2 では上記のごみ分別のエピソードを伝えることで水俣病と地元学の融合をはかり、地元学のエッセンスを伝えようと試みた。

4 - 3 JICA 研修 - 2 での成果、反省点

JICA 研修 - 1 での地元学の探求、その歩みをより深めることが JICA 研修 - 2 でのテーマだった。新しい取り組みとしてはよりテーマを細分化させ、エッセンスの抽出を心がけたことだった。結果見えてきたものは、JICA 研修 - 1 での課題だったと言える。

成果としてはテーマの細分化として具体的な事例であるごみ分別から地元学のエッセンスを伝えようとしたことが挙げられる。この点は JICA 研修 - 1 と比べればかなりスムーズにいった。加えて特筆すべきはワーク「あなたの村、私の村」で研修生の地域へのまなざしを捉えようと試みていることである。これはスケジュールにあるように JICA 研修 - 1 でも取り組もうとしているが、時間不足のためにできなかった。ただ今思えば時間不足というだけでなく、地域へのまなざしを捉えようとする意志や必要性を十二分に実感していなかったからだと思われる。それぞれの現状認識を共有することは国際セッション、研修員双方にとって有益であった。また実践をイメージする点でも役に立ったと思われる。

反省点としては地元学の概要説明を沢畑氏にお願いしたことである。沢畑氏は久木野という地域で地元学の考えを用いて地域づくりを行っている実践者である。必然的に久木野地域での活動を紹介することで地元学を伝えようとなった。しかし、地元学の実践例とはいえ、活動とその成果だけを講義しても、伝わらないことが明らかになった。地元学のコンセプトはシンプルで平易であるが故に、どのようにして結果にたどり着いたのか、そのプロセスを丁寧に伝える必要性を痛感させられる結果となった。

²² 遠藤邦夫「もやい直しとコミュニティ再構築」『地域から描くこれからの開発教育』p.247-248.

反省点は地元学の背景である水俣病を伝えるのに集中しすぎて、肝心の地元学の作法の説明がおざなりになってしまったことだ。この点は実際にあるもの探しをする際に研修員の役割が明確化しないことで明らかとなった。ただし、これはただ単に説明や配慮が不足していたというよりは、国際セッション内での理解が浅かったために現時点ではこれだけしかできなかったという現実を反映したものであったことが後に明らかになる。加えて質問の仕方でも「あるものをあるがままに聞く」というポイントがあるが、そういった質問の仕方では何が明らかになるのか、地元学では価値観の変換が必要であるが、それらを押さえることが欠落していた。

結論としては、成果は地元学のエッセンスを抽出した再編の形が見えてきたこと。課題は、地元学の背景に特化しすぎて、肝心の地元学の説明が弱かったこと。地元学の作法をどう表現するか、が大きな課題として残った。

4 - 4 実践的地元学への第一歩

上記を元に考えると JICA 研修 - 2 での最も重要な成果は、実践的地元学への第一歩を踏み出したことであると言える。結果から見てそう言えるだけで、当時は全く意図していた訳ではなかったのだが、同じく認識はしていなかったが、JICA 研修 - 1 では入門編地元学の完成形を目指していたと言える。その段階を経て、実践編地元学への第一歩を踏み出したのだ。なぜ踏み出せたか。JICA 研修 - 2 は JICA 研修 - 1 と比べて反省点が多かったからではないかと思う。研修内容や国際セッションでの地元学理解度に大差はないが、スケジュールが一日短いことでより重要なプログラムを残す必要に迫られたこと、講師の設定ミスなどにより反省感が残ったことが大きい。JICA 研修 - 1 では地元学研修の再構築を始めたばかりで、それなりに前進もあり、また達成感もあった。それゆえ課題を見つけるまでには至らなかった。今回は 2 度目ということもあり、数々の問題点が浮かび上がってきた。

例えばカメラを使わずに発表まで行った。発表自体の質が特別悪かったわけではないが、あるもの探しがどうもしっくりこなかった。カメラを使わない分、フィールドに出ても手持ちぶさたなのだ。それに気付いてカメラの存在を問い直してみると、地元学で大切にしている「あるもの」という概念を理解しているかどうかの一つの訓練でもある、ということがわかった。地元学の概念でのあるものを発見し、シャッターを押す。そしてプリントし、みんなと共有化する。そこにプリントされたものは従来の概念での資源だけでなく、地域の人や、古い農具、水の使い方などであった。それらを確認することで地元学が包括している資源という概念のパラダイムシフトができる。そういった効果があることを理解せずにネガティブなインパクトを避けるためにカメラの使用を止めてしまった。そしてそのカメラを頼りすぎていることもまた明らかになった。なぜならカメラを撮らないだけで手持ちぶさたになるぐらい、他の要素を押さえられていなかったからだ。他の要素に

についてはこの時点では気づけずに、JICA 研修 - 3 を経てようやく気づくことになる。この他の要素の不足に気づいたことが、実践編地元学への扉を開くこととなる。

5章 JICA 研修 - 3 実践編地元学の扉を開く

2008 年 11 月 19 日から 21 日まで三日間、「JICA-NGO 連携による実践的参加型地域開発コース(A)」(以下 JICA 研修 - 3)の研修を相思社で受け入れた。

「JICA-NGO 連携による実践的参加型地域開発コース(A)」の概要

JICA 研修全体の概要は下記の通りである。研修期間、2008 年 11 月 3 日から 12 月 19 日までの約一ヶ月半。研修員は 12 名、8 カ国(アフガニスタン・ブータン・ドミニカ共和国・ケニア・フィリピン・ソロモン諸島・ドンガ・ウガンダ)の現地 NGO 職員(または現地 NGO と連携しつつ地域開発を担当する政府機関等の職員)。ファシリテーターは長畑誠氏。主な研修場所は独立行政法人 国際協力機構(JICA) 大阪国際センターとなっている。コースの内容は「途上国で地域開発プロジェクトの計画立案に携わる参加者が、より持続的・効果的な参加型地域開発のためのアイデアや手法を獲得し、自国でのプロジェクト改良に貢献することを主たる目的とする。ケーススタディやワークショップを中心とした問題解決型の研修である」となっている。研修内容は「コース全体を下記 4 つのモジュールに分け、テーマに沿った事例分析やフィールドワーク等を実施する」となっており、以下の 4 つのモジュールで構成されている。²³

Module 1:	What is community? (コミュニティとは何か)
Module 2:	Outsider's role in community development (コミュニティ開発における外部者の役割)
Module 3:	Diversity-based conflict resolution and linkage method with a wide variety of stake-holders (多様性に基づく紛争解決、多様なステイクホルダー間の連携)
Module 4:	Reflection and Making Your Own Action Plan (ふりかえりとアクションプラン作成)

²³ http://park15.wakwak.com/~knc/kncwhat/sponsor/jica_ngo2008.htm 2009/2/1

5 - 1 JICA 研修 - 3 のスケジュール

水俣での地元学研修の概要

実施期間は 2008 年 11 月 19 日から 21 日の 3 日間である。相思社では従来通り国際セッション 3 名で対応した。スケジュールは以下の通りである。

11月19日(水)	
<p>9:00 ~ 9:30 場所：相思社</p>	<p>ビデオ『Minamatas`s Message to the world』17:44 日本人であればある程度のイメージがあるが、研修生にとっては全く情報がないので、最初に水俣病についてのイメージを掴んでもらうために映像を入れる。</p>
<p>9:30 ~ 10:20 場所：相思社</p>	<p>水俣病歴史考証館見学 - 坂西卓郎 地元学は水俣病の問題を前提に生まれた。そのマイナスをプラスに転換していく取り組みである。ゆえに水俣病を踏まえずして地元学の本質は理解できない。考証館見学を通じて、水俣病の差別、偏見などがどう生まれ、どう問題となったのかを学ぶ。</p>
<p>10:45 ~ 12:00 場所：茂道</p>	<p>杉本肇さんの語り（水俣病患者家族）聞き手：遠藤邦夫 肇さんは、患者多発地域の茂道の出身であり、生まれた時から水俣病と付き合わざるを得ない人生を送ってきた。その重圧から一度は水俣を離れたが、水俣で生きていく決心をして戻ってきた。聞き手遠藤が、水俣病がどう人生に影響を与えたか、また今なぜ水俣に戻ってきたかを引き出す。肇さんの半生を通じて、水俣病の偏見、差別のケーススタディを行う。</p>
<p>14:00 ~ 15:30 場所：相思社</p>	<p>吉本哲郎（地元学提唱者）講義 地元学の提唱者である吉本哲郎氏より、地元学の概略を聞く。考え方や今までの活動などを豊富な経験から話してもらう。ここで全体像のイメージを掴んでもらう。</p>
<p>16:30 ~ 17:30 場所：相思社</p>	<p>ワーク「あなたの村、私の村」 - 坂西卓郎 それぞれの活動地域の自己紹介をしてもらう。そして、その中から3つキーワードを抽出してもらう。ここで地域の何を説明する</p>

	<p>かですその研修生の地域への視点が見える。このワークの狙いはこれから地元学のワークをする上で、まず自分の地域をことと繋げて考えること。自分の立ち位置や価値観を知ることである。村の課題ばかりに目が行っていないか。村の当たり前になるプラス面をどう見ているか。それぞれの現状認識を語ってもらう。</p>
<p>17:30～18:00 場所：相思社</p>	<p>遠藤邦夫講話「ごみ分別の意味」、英文あり 水俣病の差別、地元学の概要は学んだ。ここで両者を繋げて、地元学の本質的な理解を深めてもらう。地元学＝あるもの探しではなく、その考え方、思想にこそ学ぶべきポイントがある。ごみ分別がもたらしたのから地元学を考える。</p>
<p>18:00 -</p>	<p>ごみ分別見学 18区 リサイクル推進員 作田修造氏 実際に地域の人のごみを分別している様子を見学する。 遠藤家、坂西家、2班に分かれて実際にごみ分別を体験する。</p>

11月20日(木)	
<p>9:00～10:00</p>	<p>チッソ見学(相思社職員は入れない。見学終了後合流予定) チッソを見学しても水俣病のみの字も出てこない。内容は、環境に優しい企業チッソ、になる。ISOとかの話。あまり面白くはないが、ある意味現在のチッソを象徴する内容とも言える。</p>
<p>10:00～10:30</p>	<p>相思社職員によるチッソ説明、遠藤、坂西 チッソの正体を伝える。現在の排水口、患者センターなど案内。</p>
<p>11:30～12:30</p>	<p>昼食(愛林館・インドカレー) 久木野地域の村おこし施設。棚田や里山保全などに力点。 村丸ごと生活博物館の紹介(富吉)愛林館レストランにて30分</p>
<p>13:00～13:30</p>	<p>フィールドワークの説明(坂西) フィールドワーク - 大川生雄(大川生活学芸員)</p>
<p>13:30～16:00 場所：大川</p>	<p>富吉正一郎(水俣市役所) 最初に村丸ごとの説明を富吉さんにしてもらった後、あるもの</p>

<p>16:00～17:00 場所；大川公民館</p>	<p>探しのポイントをフィールドで歩きながら説明する。 JICA 筑波での際の反省点。今回は実際に外部者である富吉氏がどのようにアプローチしていったか、そしてそれを地域住民である大川さんがどう受けてきたかのエピソードを語ってもらう。 テーマは4つ。1.「導入 - 地域にデメリットはない」、2.「村が化粧をする」「人が元気になった」、3.「村の人の力ば引き出す」、4.「ここで死ねて良かった」。別紙詳細あり。</p> <p>地元学作法の振り返り、質問時間 水俣からのメッセージ～地元学の目的とは～ 坂西卓郎（相思社） 今回は地元学の目指すもの、というテーマで結論を述べる。地元では経済開発には結びつかない、むしろ内発的発展の一つの形と言える。このことは経済開発の必要な地域の研修生には理解しにくいかもしれない。また、物質的に豊かな生活をしている私たちが言っても説得力がないかもしれない。しかし、水俣病を経験した水俣からのメッセージは経済開発からの価値転換である。地元学はその考え方を総称しており、今回は素直に投げかけてみる</p>
<p>18:00～</p>	<p>大川公民館で交流会、大川からも数名参加予定。</p>

11月21日（金）	
<p>9:00～ 9:30 場所：頭石公民館</p>	<p>あるもの探しレクチャー 講師：遠藤邦夫 あるもの探しの手法など（写真を使わないことの意味も説明する）</p>
<p>10:00～12:00 場所：頭石</p>	<p>頭石にてあるもの探し - 遠藤邦夫、長畑誠氏、坂西卓郎 案内人 - 頭石より3名（勝目豊ほか） あるもの探しは一つの疑似体験である。あるもの探しをやることだけで地域づくりはできないが、そのエッセンスはあるもの探しに凝縮されている。あるもの探しをそれぞれに地域でやるというよりは、あるもの探しを通じて地元学の本質を学ぶきっかけとする。</p>
<p>12:00～13:30 場所；頭石公民館</p>	<p>昼 食 頭石での地元料理 インタビューの時間</p>

13:30～15:00	今回は研修員が14名なので、3つぐらいのグループに分ける。
15:30～17:30 場所；頭石公民館	共有化 - 遠藤邦夫（ポストイット、模造紙使用） あるもの探しを通じて発見したことをシェア、分類する。 絵地図の紹介も作業はグループ毎に行い、発表をしてもらう。

5 - 2 JICA 研修 - 3での取り組み 富吉正一郎氏のアプローチの検証

今回の新しい取り組みは2日目のフィールドワークである。JICA 研修 - 2での課題であった地元学の手法をどう伝えるか。具体的には地元学の大事なエッセンスをどう抽出し、どうフィールドで表現するか。国際セッション内での検討の結果、水俣市役所職員の富吉正一郎氏が外部者としてどのように村丸ごと生活博物館にアプローチしていったのかを詳細に検証し、そこからエッセンスを抽出することにした。そしてそのエッセンスを伝える方法としては、富吉氏と一緒にフィールドを巡り、具体的なエピソードを通じてエッセンスを伝えることにした。

5 - 2 - 1 インタビューから抽出した風の地元学のエッセンス

富吉正一郎氏のアプローチの検証として2008年7月18日にインタビューを行った²⁴。富吉氏は1979年水俣市生まれ。水俣高校卒業後、水俣市役所に入る。現在は企画課元気づくり推進室で、村丸ごと生活博物館の担当者である。インタビューでは富吉氏が村丸ごと生活博物館にどのようにアプローチをしていったかを聞いた。

富吉氏は水俣生まれと行っても、頭石や大川のような農村ではなく、マチ生まれであり生活経験においては異質な外部者である。そのアプローチは筆者にとって大いに参考になるものであった。富吉氏へのインタビューから下記4つのテーマを抽出した。1. 「導入 - 地域にデメリットはない」2. 「村が化粧をする。その理由をつくる」3. 「教えるんじゃなくて村の人の力ば引き出す」、4. 「ここで死ねて良かったと思えるように」。以下、具体的なエピソードから地元学メソッドを抽出する。

5 - 2 - 2 テーマ1「導入 - 地域にデメリットはない」「財政支援なし」

このままいくと村の人が、村だけじゃ生きていけなくなってしまう。村がなくなる。吉本さんは村丸ごと生活博物館を説明する時に「この取り組みをすることで実害はない」と言ったですよ。何かって言ったら、村の人はメリットよりデメリットば気にするとですよ。だけん吉本さんが言った

のは、「村の人が村のためにずっとやけん、もしこの博物館があって何かもめごとがあったり、問題があったらやめりゃいい。誰も困らん」って、「じゃあとにかくやってみるか」って始まったです。基本的に村で問題になれば辞めたらいいっち思います。(08.7.18 富吉)

あくまで水俣の事例ではあるが、農村地域ではデメリットの方が気になることがしばしばある。これは外部者、行政が行った新しい取り組みでの成功体験が少ないからだと思われる。ゆえに外部者が入ってくるというだけで警戒心がまず湧き起こる。国内ばかりではなく国際開発の現場でも同じことが言えるのではないだろうか。実際に JICA 研修員にも同種の経験を持っている人がいた。そんな時に導入した一つの地元学アプローチ。誰のための地域開発なのか、地元学アプローチでは地域住民が主体である。地域に迷惑がかかるのであれば中止する事は当然だと言える。むしろ中止できないとすれば、それは外部者のための援助と言えるのではないだろうか。地元学アプローチでは地域住民に中止の選択肢がある。村まるごとを導入する際の吉本の言動から地元学が大切にしている「地域づくりの主体は誰なのか」という強いメッセージが伺える。加えて村丸ごと生活博物館には水俣市からの財政支援はない。それにも関わらずのべ参加者人数は四千人を超えている。

5 - 2 - 3 テーマ2「村が化粧をする。そのための理由をつくる」

博物館で起きた現象ちいったら、人が元気になって、村も化粧ばし出したですよ。女の人も家の中じゃ化粧をせんですよ。人に見られんばせんですよ、村もお客さん来るようになったら、ごみば拾うようになったり。あと自動販売機をなくすわけじゃなくて、竹の櫓で囲ってみた地とか。今までプラスチックの櫓だったのを竹の櫓に変えたりとか。いくら行政が「ゴミを拾って下さい」って言っても拾わんとです。でもその理由ができたですよ。畑も荒れているところをなくそうち言っても作らんとですよ。でもお客さんが来て、食材足らんけん作らんけんといかんちなったら作つですよ。博物館自体、理由を作るのかなち思うです。(08.7.18 富吉)

外部者の役割を考える上で重要なことは、解決へのアクションを起こすには動機付けが重要だということが言えるだろう。当事者主体での開発なら外部者は全てをやってはいけないのは当然だが、解決策だけを与えても当事者は動くとは限らない。むしろ国内、海外問わずそういった失敗例はかなりあるだろう。パターンリズムの弊害とも言える。村丸

²⁴ 坂西卓郎『ごんずい106号』「水俣に自身ば持たせてくれた、村丸ごと博物館の人た

ごと生活博物館では、解決策を与えることはせずに「理由」をつくった。その「理由」が当事者をやる気にさせ、後は主体性に任せることで成果を出した。国際開発の手法である Participatory Learning Action（住民主体の学習と行動による開発、以下 PLA）の概念で言えば「指示棒を渡す」となるだろうか。やらせない、やる気にさせる。その為に他の人の視線を用いた。日本人の心理をうまくついたアプローチと言える。村丸ごと生活博物館の人たちは、それらを指して次のように述べている。「村丸ごと生活博物館の火をつけたのはお客さん」「村のよさを、よその人が教えてくれた」。

「村のためを思って指示しても誰もしてくれない」という経験は地域開発に携わったことのあるものであれば経験のある人も多いのではないだろうか。それがどんなに良くできた計画であっても結果はさほど変わらない。ここには主体性の問題がある。なにも地域開発に限った話ではない。身近な話で言えば、誰しも親や教師から「勉強しなさい」と言われた経験があるだろう。子どもや生徒のためを思えばこれほどの的を射た答えもない。もちろん近代教育を肯定したとすればという前提つきではあるが。しかし、結果はどうだろうか。言われたことで勉強をする例はそう多くはないだろう。よしんば勉強をしてもそれほど能率は上がらない。しかし、自発的にその気になれば自分でも驚くほど能力が向上したり持続したりする。これと同じで地域開発においても直接解決策を指示するのではなく、その為の理由をつくることで地域住民の自発性を呼び起こし、結果を得る。村丸ごと生活博物館での「理由をつくる」とは富吉氏が述べているように「お客さんを連れてくる」ということだった。このアプローチは様々な地域で活用できるのではないだろうか。

5 - 2 - 4 テーマ3「教えるんじゃなくて村の人の力ば引き出す」

おもしろいのは博物館各地区に何十回って行くととですけど、お客さん
と行ったら最低一個は知らんことがあつとです。その地域について。例え
ば小屋の屋根が、杉の皮なんですよ。「なんでですか」って聞いたら「上
ばほお見てみんな」、見てみると梨の木があつとですよ。で、その梨の実
が落ちて、瓦だったら割れるから杉の皮なんだって。「へえ～、なんで教
えてくれんとですか」って聞いたら、「お前が聞かんけん」って（笑）
（08.7.18 富吉）

上記のエピソードからは外部者の姿勢であり、かつ手法が抽出できる。水俣における外部者がそうであったように、しばしば外部者は地域の人に教えるという援助を行ってきた。そのことの弊害は前述した通りである。それを踏まえた上での方法論が上記と言える。

ち」水俣病センター相思社編 p16-22.

地域の人は豊富な生活体験を持っている。その中には有益な知識、経験が豊富にある。しかし、地域の人は日常ゆえに当たり前だと思っている事がしばしばある。それを外部者の視点で気付くまなざしを持つことが重要。先入観を持たず、素直に問いの形で地域住民に投げかけてみる。その行為によって「力を引き出す」ことができる。あとは素直に地域の伝統的な創意工夫に驚き、評価をすれば良い。その連続行為によって、地域住民は地域にあるものを再発見していく。これはあるもの探しにおける外部者の役割の最も重要な点だと言える。ただ「良い問い」「事実を聞く」というのはそれほど容易ではない。そのことは後述する。

5 - 2 - 5 テーマ4「ここで死ねて良かったと思えるように」

博物館の担当として一番怖いのは、人が死ぬことですもん。いかにその人たちに生きていうちに楽しいと思わせるかとか。写真でも渡しといて、ああこんなあったね、って思わせるとか。良かった大川に暮らしとって。ここで死ねてって思えるところにしたいなって。人が亡くなった時には博物館の人達で、総菜とか、にしめとか。今まで良くしてくれたけんって。それもすごい良い事やなち思ったです。やっててよかったなち言われるっとはですね。

日本の70代、80代の人たちは戦後日本が良くなるためにがんばってきたですよ、何十年って。でも、途中で都会にしか良いものはないっち言っていないがしろにされてきたですよ。その人たちに活躍の場を与えたり、ありがとうっち言われる場を作るのかなち思うとです。俺個人の意見としては、人はありがとうっち言われないと生きていけんち思うとですよ。

(08.7.18 富吉)

上記のエピソードは水俣における地元学の目的と理解できる。日本における農村開発の目的と言ってもいいだろう。日本の農村過疎地ではいくつかの例外を除いて、今は経済開発というよりも「ここで死ねて良かったと思える」というような環境を作ることが重要になってきている。GNP(国民総生産)ではなく、GNH(国民総幸福量)という方向性である。つまり村丸ごと生活博物館においては農村の過疎化がテーマ、課題である。このことは今まで明確には認識されていなかった。村丸ごと生活博物館では、その解決方法として前述したように「理由をつくり」、結果として「村人が元気になる」としている。

5 - 3 JICA 研修 - 3 の成果、反省点

今回の JICA 研修では、上記のエピソードから富吉氏のアプローチを伝えることで地元学の手法をカバーできると考えていた。しかし、3 日目のあるもの探しで顕在化したことであるが、それだけでは不十分なことが明らかになった。以下に反省点を述べる。

5 - 3 - 1 - 1 事実を聞くことの難しさ

事実を聞くという言葉は平易である。しかし、実践するのは難しい。JICA 研修 - 3 でこんなやりとりがあった。フィールドワークを初めてすぐに畑で里芋を掘っている年配の女性がいた。リーダー役である遠藤が「里芋を掘っているんですか」と質問した。すると女性は「はい」と答え、やりとりはそこで終わった。次に富吉氏のグループが来た。富吉氏は「何をしているんですか」と質問した。すると女性は「里芋をほっとります。そして石がごろごろでてきたでな。今ととるところですじゃ。畑を広げんばな」と答え、それをきっかけに様々な事実を引き出すことができた。このやりとりからもわかるように簡単なようで事実を聞くというのは難しいことがわかる。このことから「事実を聞く」という認識だけでは不十分で、そのために深い理解と方法論が必要だと言える。

5 3 - 1 - 2 あるもの探しの難しさ

あるもの探しは難しい。だからこそ手法をきちんと伝える必要がある。筆者は上記のエピソードが手法たり得ると考えていたが、実際には地元学の概念であったり、手法としては不十分であったりした。具体的には別の手法が地元学にはあることに思い至った。一つの例を挙げれば、「地名や物の名前を聞く」というセオリーがある。地元で使われている呼称には文化や知恵が詰められているケースが多々ある。よって自国語や英語に変換せずに記録し、その知恵や物語を辿ることが重要である。それは外部者としての情報収集としても重要であるし、地元の人への気付きとしても重要である。名前から物語を辿ることで、地元の人が普段意識していなかった事実を再認識することが可能だからである。

あるもの探しにおける上記のようなセオリーをできるだけ抽出していくことが必要である。その積み重ねであるもの探し、ひいては実践の場での外部者の役割が形作られていくことになる。

5 - 3 - 2 共有化段階での課題

繰り返しになるが、地元学のあるもの探しの最終段階ではあるもの探しで発見したあるものをできるだけ書き出す。そしてそれを地域の人と外部者が共有化し、カテゴリ化する。いわゆる KJ 法を行う。前述した共有化である。そして絵地図やカテゴリ化した成果物を地元の人に向け発表する。その事で外部者が見た地域の良い所を地元の人に伝える。地元の人には当たり前すぎて気付いていなかったことに気付いたり、外部の人が良い評

価値をしてきたこと自体に誇りを感じ、地域への愛着を強めていく。そしてその成果物は外部に持ち出さず地元においていく、というのが従来の方法であった。ここでは地元の人には外部者の気付きから誇りを与えられる存在に過ぎない。確かに誇りによってその後の主体的な活動に繋がっていくケースもあるだろう。しかし、あるもの探しにおいては、地域ガイドと成果を与えられる受け身な存在でしかない。これでは依然として外部者主体のプロセスであり、目的は地域の資源としながらも「地元の人には気づけないことを外部者の視点でもって見つけ、与えてあげる」という従来の開発での力関係を維持している。PLAの提唱者であるロバート・チェンバースが指摘している「データを引き出し自らの目的のために利用したファシリテーターが主な受益者となった²⁵」という問題が地元学でもまた横たわっているように感じた。

筆者は地元学への理解を深めるに連れて、この点への疑問が増していった。外部者の役割とは誇りを与えることだけなのか、やはり地元学は外部者のためのものではないか、地元の人にとって本当に役にたつのか、と。

5 - 4 問題解決手法としての地元学

上記の疑問はある考え方の転換で解決された。国際セッションでの検討を経て、地元学を実践的な問題解決手法として捉え直してみた。すると現状の理解での地元学には大きな課題が出てくる。「ないものねだりではなく、あるものを探しやってみよう」という地元学の考えを実践するために地域であるもの探しを行う。しかし、何のためにあるものを探すのか、その目的が曖昧だった。従来の理解ではただ地域の資源をみつけるだけであった。その資源がいわゆるインフラ等だけでなく、昔の知恵や生活文化を対象としている点が新しいだけであった。

5 - 4 - 1 「水俣病の水俣」の課題とは？

そこで再度地元学を検証してみた。すると自分たちでテーマとしていた「地元学の背景としての水俣病」に行き着いた。つまり水俣病によって地域の対立、偏見差別が生まれた。その解決のために地元学は生まれた。その時の水俣の課題は、患者だけでなく大多数の水俣市民が「水俣病の水俣に誇りを持ってない」、「自分の出身地が言えない」ということであった。だからこそ「水俣病の水俣」だけでなく、地域にあるもの、水俣病以外のものを探そうと試みた。その成果は、東部地図、水のゆくえ、寄る会の活動などに表現されている。加えてごみ分別を始めることによって初めて外部から好評価を与えられることで誇りを取り戻していくというプロセスもあった。それらを解決するための手法があるもの探しである。実際に水俣ではあるもの探しのワークをやったわけではないが、一連の取り

²⁵ ソメシュ・クマール著、田中治彦監訳『参加型開発による地域づくりの方法』明石書

組みの考え方はあるもの探しに凝縮されている。水俣での地元学の成果としては「水俣市民が水俣病を語れるようになってきた」と言うことができる。

一つの事例を紹介したい。2003年鹿児島県でサッカー大会が行われ、水俣第一小学校の生徒が参加した。そこで他県の生徒に「水俣病が来た、病気がうつる」と言われた。言われた少年は傷ついて水俣に帰ってきた。そして、家で家族に向かってそのことを話した。水俣病がタブーの水俣で家族にそういったことを話せるだけでも大きな前進ではあるが、この話にはまだ続きがある。その話を聞いた姉がその少年に怒ったそうだ。「あなたは学校で水俣病について勉強してきているのに、なぜ何も言い返さなかったの」と。そしてその発言をした小学校の校長先生に抗議した。「水俣病の水俣」と外から見られるのは仕方がない。しかし、それを言われた時に水俣市民がどう対応できるかが重要であり、問われている。今回の例は水俣市民が水俣病に向き合い始めていることが証明されており、水俣で進められてきたもやい直しの成果と言えよう。その背景には地元学があったことは今まで述べてきた通りである。

5 - 4 - 2 村丸ごと生活博物館の課題とは？

次に村丸ごと生活博物館の事例を考えてみたい。5 - 2 - 3で述べた「村が化粧をするようになった」というのは村丸ごと生活博物館の代表的な成果を示すフレーズである。生活博物館の大きな成果と言っても良い。なぜこの言葉が成功を象徴できるのだろうか。ここで地元学の概念でこの現象を捉えてみたい。地元学アプローチではある課題に対して、お客さんを連れてくる、という答えを設定したと言える。その成果が「村が化粧をする」である。お客さんが来て、村が化粧をする、つまり村が元気になることで得たものとは、隠されている課題とはなんだろうか。

村丸ごと生活博物館では必ずしも経済的な成果を指向していない。「村の元気」という言葉も経済的な活性化だけを指す言葉ではない。言葉通りに人が元気になることがその中心である。頭石の代表である勝目氏によると「頭石地区は、人の流出が止まらず、農村は荒れる山は荒れる。これを「どげんかせんば」という声がありました²⁶」と村丸ごと生活博物館を始める動機を語っている。つまり人口流出による「農村の過疎化」がそもそもの課題であったと言える。だからこそ、地域へのまなざしを転換させ、ポジティブな面を見ようとしたことが有効であった。村まるごとでは地域の資源を見つめ直し、外部者の視点を取り入れることで、生き甲斐を持って暮らしていくことを可能にし、過疎化による地域の衰退を押し留めている。別の見方をすれば、あるもの探し等によって地域の誇りを取り戻すことで住民の頭石での生活の満足度を向上させ、若者の地域外への流出を防ごうという活動と捉える事ができる。しかし、このアプローチだけでは過疎化への対策は十二分

ではない。村丸ごと生活博物館頭石地区の代表勝目豊氏が「子どもに継いでこなかった」と言うように生活文化の断絶は大きな壁となっている。過疎化自体も緩やかにはなっても増加へ反転してはいない。しかし、村丸ごと生活博物館ではそういった断絶を越えようと子ども世代への継承の取り組みが生まれつつある。

5 - 4 - 3 きっかけづくりから課題解決型手法へ

上記2点を解決するためにあるもの探しは有益であったのだ。つまり「ないもの探し」をする。実際にはないもの探しを改めてやった訳でなく日常から体験されていた「ないもの」の存在があった。それは地域への誇りだった。水俣では水俣病ばかりがクローズアップされることによって、誇りを無くしていたことが水俣全体で意識されていた。結婚ができない、就職できないというように日常で痛感させられていた。その解決手法として「あるものを探す」、そして今まで資源とっていなかった資源を見出し、解決のプランを作っていく、その際に「ないものねだり」をしない、というプロセスである。吉本自身が「発見は、村をどうにかしたいという意味が見つけてくれます」とベトナムで述べている。どうにかしたい、という意味なくしてはあるもの探しをしても機能しないのだ。どうにかしたいという意志こそ隠された課題の存在を示している。今までは課題の存在に気付いていなかったのだ。

ここで注意したいのは、たまたま「水俣病の解決」と「農村の過疎化」という課題であったからあるもの探して地域資源の再発見をすることが解決に繋がったということだ。筆者は今まで「地元学の概念は汎用性はあるが、あるもの探しには汎用性はないのではないか。例えば経済開発などには役に立たないだろう。地域資源の再発見だけで全てがうまくいくはずがない」と考えていた。しかし、それは上記の偶然性の発見によって、あるもの探しの矮小化であると気づいた。あるもの探しは課題の設定こそが重要であって、今まではそれを自明の理として行ってきただけであった。水俣と村丸ごと生活博物館の課題がたまたま同じであったことによって見過ごされてきたのだ。課題の設定次第では他のテーマ、例えば地元の資源を生かした小規模経済開発などには有効性を発揮できるのではないだろうか。

上記のように考えると研修も劇的に変化しうる。また外部者の役割も地域の人に誇りを与えるだけという限定的な役割からも解放される。むしろ従来の理解では外部者の役割としては不十分と言える。従来のスタイルでは誇りを与える役割しか想定されていなかったが、上記のように地域にある課題をあるもので解決すると考え直してみると、新たな外部者の役割が浮かび上がってくる。それは吉本が言う「あるものとあるものを組み合わせる新しいものをつくる」という段階での役割だ。具体的にあたらしいものを作る段階は共

²⁶ 水俣病センター相思社『ごんずい106号』「ごんずい座談会」p.8-13.

有化の段階である。あるもの探しによって見出された資源を地元の人と一緒に共有化をするプロセスが重要になるが、そこに外部者の役割があるのではないだろうか。設定されていた課題解決のためにさらなる地元の人を知っている資源を引き出す。そしてその資源と地元の人だけが持っている知恵 - 多くは伝統的なもの - を引き出し、組み合わせる。地元の資源をどう使ってきたかは地元の人しか持ち得ない。そのあるものとあるものを組み合わせることこそが地元学の本来の目的であろう。こう考えると外部者の役割は地域を褒めて誇りを与えたり、気付かせるだけでなく、立場の違う視点、役割を集めることによって共に課題解決へと向かっていく協働のパートナーと位置づけることが可能になる。

5 - 5 実践編地元学における外部者の役割

「新しいものはあるものとあるものを組み合わせてつくる」と吉本は言う。この事を筆者が理解できるようになったのは JICA 研修 - 3 を終え、前項で述べたように地元学を課題解決手法として捉え直してからだった。つまり理解するのに3年の時を要した。筆者の力不足を差し引いても、この言葉の意味は地表深くに隠されており、地元学理解への一つの壁と言って良いのではないだろうか。

あるもの探しで見つけたあるものと、あるもの、もしくは地元の知恵や人、人の情報、文化、風習などを組み合わせて新しいものをつくる。何度も聞いていたが、その「新しいもの」が何を示しているのか、何のために「新しいもの」が必要なのかもわからなかったのだ。前項で述べた思考の変遷を得てようやく問題の存在を理解できた訳だが、地元学では「問題解決」とは言わない。それは吉本の「問題解決型から価値創造型へ²⁷」という考えから来ている。しかし、分析を進めていくと新しいものとは問題に対する解決策と言わざるを得ないことが明らかになった。

ここで重要なのは水俣における地元学にとっては水俣病の克服が課題であった、ということである。他の地域では水俣病問題はない。つまり他の地域で地元学を実施する際には別の課題を設定しないといけないということだ。こう述べると平易であるが、少なくとも国際セクションにとっては新しい知見と言って良いぐらいの発見であった。研修を実施している国際セクションにしてから上記の意味を理解していなかったことは地元学の一つの現実を示している。つまり水俣地元学は水俣病問題の克服を課題としているが、一般的に言われる地元学は地域づくりを課題としている。両者の混同がしばしば実施者、研修参加者を混乱させていたと思われる。

では具体的に「あるものとあるものを組み合わせて新しいものをつくる」とはどういったプロセスで可能なのだろうか。まずあるものはあるもの探しで見つける。そして「新しいものをつくる」作業はあるもの探しの最後の段階、地元の人との共有化の中で行

²⁷ 吉本哲郎「地元学をはじめよう」岩波ジュニア新書 p.26-28.

われる。イメージとしてはあるものを元にさらなる地元の人々の経験や知識、文化などをあぶりだし、解決策であるあたらしいものを作っていくということだと思われる。しかし、その方法は依然明確化されていない。吉本の経験知としては存在するのだろうが、どこの資料にも明文化はされていない。そこで吉本の言動から共有化で新しいものを作る方法および外部者の役割を紡ぎ出してみたい。

5 - 5 - 1 作法その1 地元の人々の意識を超えない

吉本はこう述べている「石牟礼道子さんが言うのは、水俣病患者より意識が先に出てはいけない。理由は、先に出たら患者と患者の運動を指導し始める。水俣で起きたことで、患者は闘ってきただけでなく、家に帰れば生活が待っている、ここで離反しちゃうわけですよ²⁸」。水俣病の運動の中ではしばしば当事者である患者を超えて支援者が主導権を握るケースがあった。むしろ患者が主導権を握ったままの運動の方が少ないくらいであり、依存型の支援が患者を抑圧してきた。当事者である患者を超えることが正当化される理由とはなんだろうか。それを探るにあたって、ネパールで「カマイヤ」と呼ばれる「奴隷」の支援運動に関わってきた定松栄一の力を借りたいと思う。定松は自身の経験から支援における「もっとも大切な問い²⁹」として次の2つの問いを挙げている。

1. 私たちが支援しようとしている当の人のびとは、何を望んでいるのか
2. 私たちの支援は、当の人のびとがおかれている状況を本当に改善するのか

定松は上記2点が重要だとした上で、前者と後者の二つの問いは、「開発協力の現場においては、しばしばお互いにせめぎ合う。なぜなら住民の要望にそのまま応えることが必ずしも状況の改善いつながらないときもある」からだと述べている。同じようなことはそのまま水俣病支援運動においても言える。支援者として患者の望みを否定する根拠があるとすれば、前者の具現化が後者にならない時だけだ³⁰。だから踏み越えてしまう。支援者(=外部者)の弊害と言えるだろう。地域開発においても同じことが言えるのではないだろうか。吉本が言うには「正しい理屈を振りかざして攻めていく」という状況だ。地域開発においては概ね外部者は知識と資金を持っていることが多い。JICA 研修員の場合もそうだろう。しかし、外部者が地元の人々の意識を超えて、先導することがあってはならない。先導した時点で地元の人々の主体性は潰されてしまう。そうなれば仮に成功しようとも失敗しようとも良い結果はもたらさないだろう。主体性なき解決策はどれだけ素晴らしくとも地域で活用されることはない。だからこそ地元の人々の意識を超えてはならないのだ。

5 - 5 - 2 作法その2 否定から入らない

²⁸ 吉本哲郎『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業 p.181

²⁹ 定松栄一『開発援助か社会運動家』コモンズ p.245-250.

³⁰ 坂西卓郎「私の支援者論」『ひろがる「水俣」の思い』作品社 p.182-200

吉本はこう述べている「水のゆくえを調べると、当然コンクリート三面張りの側溝がある。それをなぜそうしたか調べずに非難してはいけない³¹」。これは「あるべき論で言うとおかしくなる」からだそうだ。今の環境重視の視点から見ると三面張りの側溝はあまり望ましいものではない。しかし、それを否定しても何ももたらさない。結城は「あれはだめだからこうなんだという代案を出すんじゃない」とも述べている。仮に良い代案を知っていたとしても、外部者の意識で判断は下さない。なぜ三面張りになったのか、あるものをあるがままに受け入れ、問いを発していき、地元住民が考える場を提供することが重要なのだ。また吉本は「聞かれることで、おれは自ら気づいていった。地元学は対面してしゃべっているような運動ではなくて、横に歩きながらやるイメージ」と述べている。地元住民から経験を引き出し、地元住民が気付きを得ていくことを目的とすれば、地域にあるものの否定は何も生み出さない。一見、当たり前のようなようではあるが、知識を持った外部者が陥りやすい落とし穴の一つと言える。

5 - 5 - 3 作法その3 人探し - リーダー論はいらない

結城登美雄（タス・デザイン室室長・仙台市民俗研究家）は「地元学にはリーダー論は要らない³²」と述べる。「リーダー論になると人の遠隔対称性が働いちゃう」と。人は遠くにあるものをありがたがる。旅行でも遠くに行く方が価値がある気分になるし、遠くから来た人の話の方が、隣の話よりも価値がある気がする。これを心理学で遠隔対称性と言うが、地元学ではそこから抜け出すことも意図されている。身近な人の価値も普段は意識しないが、地域にあるものの一つである。絵地図を作る際「ここにはこんな人がいる」「あの人はこんな事ができるぞ」と地元の人しか知らないあるものを発見していくことも共有化での大切な役割である。地元の人が再認識していくプロセスだ。結城は言う「地元の「地の力」があらわれてくるために地元学があると思う。誰か人材がいれば解決するような気はするけども、でも、それで解決するなら地元学は別に要らんのですよ」と。リーダー論に偏ると外部者の力学構造に巻き込まれたり、地域の主体性を損なったりしかねない。もちろん地域で重要な役割を果たす人の存在は重要であるが、遠隔対称性や階部資源に惑わされない価値観を作っていくことが重要だと言える。

5 - 5 - 4 共有化段階での外部者の役割

吉本と結城の言動から上記3つの作法を紡ぎ出すことができた。これらは作法として共有化段階だけでなく地元学プロセス全般で外部者が意識しなければいけないことだと言える。PLAの枠組みで言えば「姿勢・態度」にあたるだろう。しかし、全て「～しない」となっていることからわかるように、今まで明らかにしてきたことは作法として気をつ

³¹ 吉本哲郎『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業 p.181-182.

けることでしかない。積極的にどうあるものとあるものを組み合わせるのか、またその際に外部者が果たす役割はどういったものなのか、5 - 3 - 3でもその段階に外部者の役割があると言及しながらも、その点は表出化できなかった。地元学からは見いだせなかったからだ。

そこで長年、国際開発の現場で活躍してきた中田豊一氏（参加型開発研究所代表）の理論に答えの方向性を求めたい。なぜなら中田は国際開発における外部者の役割に関して考察を重ねており、その理論は地元学での考察と重なる部分が多いと感じているからである。中田は著作『人間性未来論』で次のように述べている。

全ての人は、自分の課題を解決するために必要な知恵を自分自身の内に持っている。その知恵は経験から学びながら作り上げるものである。したがって、その知恵を顕在化して使えるものにするためには、自分の経験を振り返る際、固定観念を離れる必要がある。私たちは、何かを思い出す際、自分に都合のいいように記憶を歪めようとする傾向を強く持っている。私たちが同じ過ちを繰り返すことが多いのは、歪められた経験から導き出した知恵に基づいて課題を解決しようとするからである。しかしながら、自分ひとりで経験を正しく振り返ることは容易でない。事実を事実として明らかに「観る」ことは簡単ではない。課題を解決するために他者の手助けが必要となるのは、そのためである。逆に言えば、援助者の最も重要な役割がそこにある。私たちは、援助者のそのような役割を「ファシリテーション」と呼び、その役割を果たす者を「ファシリテーター」と呼ぶ。その意味では、ファシリテーターは常に外部者である³³。

中田が言う「経験」とは地元学でのあるものに対応するだろう。そして「知恵を顕在化して使えるようにする」という行為があるものとあるものを組み合わせて新しいものをつくる過程に他ならない。そして「固定観念から離れ、事実の共有から初め、現実をしっかりと見つめ合う作業の中で、村人は自分たちの課題に行き着く」と中田は述べている。中田が言う「現実をしっかりと見つめ合う」とは「事実をして語らしめる」ことであり、「そのやり取りの技術こそ私たちが NGO ワーカー（外部者）にとってもっとも必要な技能である」としている。そのポイントは「真実は身近な細部に宿る」としており、事例として次のように述べている。「私が注目した「事実」は、Aさんの腰に下げていた弁当籠であった。固定観念の「観念」を避けようとするならば、「物」というこれ以上ない具体的な事実を出発点にするのがもっとも近道である。とりわけ農民や漁民であれば、農具や漁具な

³² 吉本哲郎『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業 p.181-182.

どの日常的な道具を足がかりに対話を進めていくことで、次々と新たな事実が現れてくる」。これは地元学で言われていることとほぼ同じである。ただその活用方法が違う。福澤郁文（デザイン FF 代表）が「著者はアジアの開発の現場での体験から、開発の思想体系を創りだした観がある³⁴」と述べているように中田学とでも言える概念であるが、国際開発での方法論である中田の考察と地元学に共通性があることで JICA 研修員にも地元学研修が有益であると言える。中田は現実を構成する要素を「事実」「考え・観念」「感情・気持ち」の3つに分けている。

あるもの探して事実を指摘すること、顕在化させること、そして共有化段階で事実を事実と「観る」手助けをすること。そのことは中田が言うように外部者でしかできない。筆者は外部者の定義で述べた「コミュニティの開発に必要な資源を調達できないとき」とはこの段階だと今では確信している。

6章 仮説の例証 実践編地元学の創造に向けて

6 - 1 仮説の検証

研究を始めた当初の仮説は「外部者の役割とは地域住民が地域への誇りを持つことの手助けをすること」だった。そしてその事を地元学と自身の経験から紡ぎ出したい、というものだった。地元学関係の資料を見てもほとんどがそういう事例だったからだ。簡潔に言えば「地域であるもの探しをする。すると村の人が地域の資源を再発見し元気になった」というものばかりであった。この点は従来の開発に対するアンチテーゼが強く、国際開発の現場でも従来の開発から PLA にパラダイム転換があったように、外部者（行政、コンサル）主導の調査や技術移転を中心とした地域開発ではなく、住民主体、ボトムアップという点での大きなパラダイム転換と言える³⁵。支援者、外部者が正義を振りかざしていた水俣において、チェンバースが言う「先の者を後に（Putting the First Last）」という行為が水俣でも試みられた。その意味において地元学が提起した概念は重要であり、筆者の仮説はあながち的外れとは言えないだろう。しかし、今まで述べてきたように研修と研究を進めていく中でそれでは不十分だと気づかされた。

5 - 4 - 1 で述べたようにそもそも水俣地元学は水俣病によって起こった地域の対立、地域社会の崩壊を解決するために生み出された。水俣病問題こそが地元学における「隠された問題」だったのだ。水俣病市民にとって水俣病の存在は大きく、そして大きなマイナス因子であった。できれば目を背けたい存在であり、事実目を背けてきた。しかし、「水

³³ 中田豊一『人間性未来論』竹林館 p.263-265.

³⁴ 福澤郁文「書評」『南の風 No.227』シャプラニール、p.15 2008

³⁵ プロジェクト PLA 編『続入門社会科発』IDJ LIBRARY p.202-217.

水俣病の水俣」から逃れることはできなかった。進退窮まった水俣市民にとっては、水俣病を向き合うほかなかった。しかし、水俣市民にとっては水俣病というマイナス因子を打ち消すプラス因子が必要だった。それを探す方法が地元学だったと言っても過言ではない。前述したように「環境創造みなまた」では地域にあるものに評価を当てながら、少しずつ水俣病に近づいていった。

代表的には4 - 2 - 1で述べた資源ゴミの22分別がある。ごみ分別の対外的な評価によって水俣市民は初めて水俣という地域に誇りを持つことになった。そして、そのプラス因子があつてこそ、水俣病というマイナス因子を向き合うことを可能にした。地元学の文脈でごみ分別を捉えなおすと、あるものであるごみと水俣病の経験を合わせて新しいものであるごみ分別を生み出したとなる。それが地域づくりにつながっていくことは前述した。ここではその前段階について言及したい。ごみ分別を生み出す前の課題とは何だったのか。それは今までに述べてきたように水俣病による地域社会の崩壊である。ごみの総量を減らす、環境負荷を減らすという目的ではなかった、もしくは結果としては達成されなかったことは述べた通りである。つまり環境負荷が課題ならごみ分別という答えは必ずしも正解とは言えない。課題が水俣病問題であつたからこそ、その解決策としてのごみ分別が有益であつた。前述したようにごみ分別は地域に誇りをもたらし、水俣病を語る水俣へ大きく寄与することになったからだ。

ごみ分別の事例からもわかるように地元学は課題解決手法であり、共有化を通じてあるものとあるものを組み合わせることで新しいものを作る、ということが可能であると結論づけられる。

6 - 2 JICA研修を通じて、地元学から紡ぎ出された外部者の役割とは

前項で本稿での仮説の前半部分「地元学は課題解決手法である」についての結論を述べた。残る仮説は「外部者の役割はその課題解決策を見つける共有化の段階にこそ重要な役割がある」である。JICA研修を通じて明らかになった外部者の役割はどういったものだろうか。

ここで今まで明らかになった外部者の役割をまとめてみたい。繰り返しになるが、地元学の目標は最終的には「あるものとあるものを組み合わせてあたらしいものを作る」ということになる。上記を言い換えると「今ある資源を素材にして、想定されていた問題への解決策を見出す」となる。「今ある資源」を調べる方法が「あるもの探し」である。ただし前述したように調べる主体は地元の人である。外部者はその助けをするに過ぎない。その助けとは「質問して、驚く」こと。そして資源が集まったら「あたらしいものを作る」作業に入る。それが地元の人との共有化である。資源を整理し、その資源と資源を組み合わせることで解決策をつくる。この段階では外部者と一緒に調べたことだけでは不十分な場合もある。その際には有用な情報をさらに地元の人から引き出さないといけない。

ここで重要なのは地元の人々の当事者性 (ownership) である。あたらしいもの、解決策を作るのは常に地元の人でなければならない。例え同じ結論に達するとしても、地元の人から自らそこに到達する、地域住民が自ら発見 (Find out) しないと新しいものである解決策は生きない。地元学でことさらに地域住民主体と言う理由がここにあるし、「土」の地元学ではこの当事者性を得ることが重要だとしている。前述した3つの作法の存在もこの当事者性を育むためにあると言える。水俣病患者支援活動での外部者の役割、当事者を外部者がリードしてきたことを反省し、当事者性を育むアプローチが外部者の重要な役割だと5 - 2で述べた地元学アプローチ、そして5 - 5で明らかにした地元学の作法も示している。

上記が JICA 研修を通じて明らかになった外部者の役割である。つまり筆者の仮説に十分には答えられていない。共有化であり解決策作りが地元学の最終段階と言えるのは今まで述べてきた通りであるし、共有化段階における手法、外部者の役割の表出化こそが実践編地元学と言える。しかし、上記で述べた「当事者性を育むアプローチ」も当初の仮説であり、不十分だと認識した「地域住民に誇りを与える」の域を出ない。筆者が地元学から明らかにできた外部者の役割はここまでである。しかし、検証を通じて臆にはあるが、共有化段階における外部者の役割も見えてきた。そのことを6 - 4で述べたい。

6 - 3 入門編地元学と実践編地元学の関係性

さてここで改めて入門編地元学と実践編地元学を整理してみたい。PLA ファシリテーターカマル・フィヤルは次のようにまとめている。「PLA には手法、態度・姿勢、概念のバランス³⁶」が重要としている。今までの文脈で筆者は入門編地元学を概念、実践編地元学を手法、態度としてきた。入門編と実践編と表現すると、一般論として実践編の方が重要と思われがちであるし、今まで入門編から実践編への経緯を述べていたので、より進化形に聞こえるかもしれない。しかし、カマルが言うようにバランスが重要なのであって、実践編がより大事というわけではない。事実、国際セッションでも当初は入門編を明らかにしようと随分と時間を費やしたし、地元学の最も重要なキー概念は入門編地元学に含まれている。そう考えると入門編地元学ではなく、概念編地元学と表現するべきだろう。

さらに実践編地元学を紐解くにあたって今後注意しなければならないことがある。あくまで実践編地元学とは手法に過ぎないということだ。そして手法とは概念編 (入門編) 地元学があって生まれているということを忘れてはならない。中田は次のように述べている。「技法や手法は覚えて使えばそれなりに役に立つ。しかし、本質的な理解がなければ、状況が変わったら応用がきかなくなる。とりわけ、研修や教育の場などのバーチャルな場面ではなく、実際の状況を切り開くのに使えるようになるには、原理的な理解とともに

³⁶ カマル・フィヤル 『Participatory Learning and Action』2003

に、歴史的、社会的な意味も理解していなくてはならない。³⁷」中田の言う原理的な理解、歴史的、社会的な意味というのが概念編地元学にあたる。JICA 研修の特に初期の段階で歴史的、原理的な意味合いの理解に力を入れた理由でもある。この前提を忘れてしまうと、中田の言うように JICA「研修」では役に立つかもしれないが、実践では全く応用の利かないものになってしまう危険性を孕んでいる。

加えて注意しておきたいことは、チェンバースが指摘している次の点である。「多くの者は PRA は手法に始まり手法で終わると考えて、それらをトップ・ダウンで搾取的な標準化されたやり方で適用してきた³⁸」。この点は筆者も以前から感じていたことであり、地元学に関しても同様の事が言えるのではないだろうか。過度な手法への傾倒が進めば上記のような弊害を生む可能性がある。実践編地元学を創造していくにあたっては、この事を厳に慎まなければならない。

6 - 4 姿が見えてきた風の地元学実践編

今まで述べてきたように JICA 研修を通じて実践編地元学の姿が見えてきた。外部者の役割を中心に実践編地元学を明らかにしようとしてきたので、風の地元学実践編と言えるだろう。残念ながら 6 - 2 で述べたように本稿ではその全貌は明らかにできなかった。いやより正確に言えば風の地元学実践編は実践者がそれぞれに得た経験や知見を加えていくことで創造していくものではないだろうか。最後に地元学の限界を明らかにし、風の地元学実践編の完成へと向けて、その方向性を示したい。

6 - 4 - 1 地元学の限界

JICA 研修 - 3 では、JICA 研修 - 2 での不足感をどう補うかがテーマだった。今思えば不足感の正体こそが実践編地元学であったのだが、当時は全く気づいてはいなかった。取り組みとして富吉氏の村丸ごと生活博物館へのアプローチを具体的に紹介し、そこからエッセンスを引きだそうとした。この試みも実践編地元学へ歩みを進めようとした訳ではなかった。しかし、富吉氏のアプローチを分析していくとエッセンスであると同時に手法も多く発見できた。例えば「導入の際にデメリットはない」と言うことなどは当事者主体という地元学の概念でありながら手法、スキルでもあると言える。また「教えるんじゃなくて力を引き出す」のケースなども、どう問いを発するか、外部者が知るためではなく地域の人々が再発見していくために、など概念であり手法を学べる。それらを通じて、今までではできるだけ概念を理解してもらおうと努めてきたが、実践の際の手法が表現できていないことに気付いた。象徴的だったのは最終日のあるもの探しである。それまでのプログラムを詳細に組んできたことに比べれば、フィールドワークはほとんどほったらかしであった。

³⁷ 中田豊一『人間性未来論』竹林館 p.227

いや地元学でのタブーだったと言っても良い。地元学を再構築しよう意識していてもあるもの探しだけはタブーとして触れてはいけないと思ひこんでいた。しかし、実際には名所巡り化していることも作用し、今まで学びを重ねたことの練習がまったくできない。概念だけではフィールドで実際にどうしたら良いかわからないという事態になる。これはリーダー役としての筆者の感想である。実際には研修員にとっては、色々なものが物珍しいフィールドワークであり、そこには特に不満を感じていなかったことがアンケートでも明らかになっている³⁹。しかし、実践者として自分を想定してみると、今まで明らかにしてきた概念に沿って地域にあるものに目を向ける以外は何ら方法論を持ち得ていないことに気付かされた。また共有化の段階も同じだった。地元学研修はあくまで研修なので、共有化に地域の人あまり入らない。地域の人学びの場ではないし、あるもの探して地域の人新しいことを発見することなどほとんどないからだ。結果、共有化では調べたことを発表するに留まる。前述したように課題解決型地元学と定義するならこの段階で「あるものとあるものを組み合わせて地元の人と一緒に新しいモノを作る」ことが可能のはずだ。そのために抽出したのが共有化での3つの作法である。しかしながら、全て「～しない」となっていることから明らかのように具体的にどう行動すべきか、どういう手法があり得るかは未だ抽出できてない。6 - 2で述べたように「当事者性を育むアプローチ」までである。ここの地元学の一つの壁がある。地元学の事例では、この段階での外部者の役割が省かれているか、または外部者が帰った後に地域の人主体的に行動を起こした、という例がほとんどである。吉本が直接かかわったベトナムのナムソン村の例も同様で、あるもの探しをしたことにより「ナムソン村の持っている力が目に見えて立ち現れてきました⁴⁰」とあるが、どのようにそうなったかは明らかにされていない。この段階でも外部者の役割はあるはずだが、上記からもわかるように現在の地元学には残念ながら包括されていない。風の地元学実践編は創り出していく必要があると主張する所以である。

6 - 4 - 2 風の地元学実践編への道標 問題を正しく「観る」

そこで本稿では中田豊一氏の理論の助けを借り、共有化段階での外部者の役割、存在意義の方向性を示してみたい。『人間性未来論』にネパールのファシリテーター、カマル・フィヤル氏の事例が掲載されている。カマルは村の問題の解決方法を探るためのワークショップを村人を集めて行った。村人は長い時間をかけて話し合い村の問題は「電気がない」という結論に達した。カマルは問題の分析に移り、村人にこう聞いたそうだ。「その問題を解決するためにこれまで行ってきた方策を教えてほしい」と。すると電気がないという問題に対して何も行動を起こしていないことが明らかになり、ついには村人が「誰

³⁸ ソメシュ・クマール著「序文」『参加型開発による地域づくりの方法』明石書店 p.3-6.

³⁹ 国際セクション『JICA 研修員へのアンケート』

⁴⁰ 吉本哲郎『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 p.149

も何もしてねえということは、もしかしたら問題じゃねえのかもしれない⁴¹」と言う言葉を引き出した。カマルは問題が願望であって、本当の問題、課題ではなかったことをあぶり出したのだ。課題を解決するために援助があり外部者の存在意義があるのは言うまでもない。しかし「その課題は何か」ということを見つけるのは容易ではないことが上記の例からも読み取れる。吉本も常々「答えを間違っているんじゃない。問題を間違っているんだ」と言っており、地元学でもまた「課題とは何か」ということを重要視していることが伺える。

筆者は今まで解決策をゴールと設定し、そのことばかりを追い求めてきたが、実は本当の課題を見つけることこそが外部者の役割ではないだろうか。中田が述べているように自分の課題を自分で見つけるのは容易ではない。それは自身の経験を振り返ってみても明らかである。中田は「問題は正しく「観る」ことによってその本当の姿を現す。つまり課題となる」と述べている。またそのためにこそ「援助者の最も重要な役割がそこにある」としている。それらを通じて中田は「対等感」が浮かび上がるとしており、その結果浮かび上がる力は「内部者も外部者も驚くほど大きく、「共同体が成長していく姿を目の当たりにできる」としている。この点が前項で述べた地元学に欠けている決定的な部分であり、筆者が地元学において大きな空白を感じる部分である。

中田は「問題を正しく「観る」」には「自己意識の構造に対する明確な理解を持つこと」であるとし、「人間心理の深い洞察に根ざしたコミュニケーションの方法論」を生み出している。その方法論こそが実践編地元学が真の意味で実践的になるための最後の段階ではなからうか。その検証については筆者の今後の課題として留めておきたい。

6 - 4 - 3 残された課題

本稿での成果としては地元学は「あるものとあるものを組み合わせて新しいものをつくる」ことができる課題解決手法であったということが解明されたこと。そのための隠された課題の存在に辿りついたことが挙げられる。外部者の役割については風の地元学実践編の存在があり、あるものを発見する際の手助けであり、共有化段階で作法を守り、問題を課題として観ること、あたらしいもの、解決策をつくる際にも外部者の役割があるということが判明したことだけである。つまり外部者の役割については、その壁が明確に見えたと過ぎないと言える。風の地元学実践編においての外部者の役割に関しては前述したように未完であり、本稿では方向性を示すだけに留まっている。しかもその最終部分は中田氏の理論に全面的に依っているにすぎない。課題が多く残されており、実践と検証の積み重ねが今度も必要であると言える。

⁴¹ 中田豊一『人間性未来論』竹林館 p.248-251.

ただ一点だけ、今後の課題へのとっかかりを記しておきたい。中田は『人間性未来論』の中でパナマでの例を取り上げている。「村にやってきていろいろほじくり回して問題を分析し、それに基づいて説教を垂れたり空約束をする連中は自分たちを対等に見てくれないと村人たちは感じている」としている。水俣でも上記と同じような例がある。2 - 2 - 3 で述べた「知の植民地」のことだ。しかし筆者は研究者でもないし、水俣に移り住んで来ているので「知の植民地」には加担していないという意識があった。しかし研究者の調査報告などを用いて「水俣には患者への差別が根強い」と述べたり、それに基づいて正論を述べたりすることは実に多い。そのことを中田が言うように「見下している」と考えたことはない。むしろ、地域の人が言いにくい必要なことを言うというのが外部者の積極的な役割だとさえ考えてきた。相思社では社会的弱者である患者の支援を目的にしており、上記全てが問題であるとは思っていないし、正直なところ思いたくはない。それは水俣での外部者としての自身の存在を否定することに直結するからだ。しかし、そのことを振り返らずには「対等感」に近づけないのではないかと思う。この検証を今後のとっかかりの種として記しておきたい。

おわりに

この一連の取り組みには約 3 年かかった。3 年前から地元学のことは理解していたつもりだった。しかし、今から思えば筆者はその 10 分の 1 も理解できていなかったのだ。南アフリカの人から「カメラを下さい」とないもの探しをさせてしまったショックから始まり、地元学の再検証が始まった。なんとか地元学から外部者の役割を抽出しようと試行錯誤を続けた。そして国際開発の経験豊かな JICA ファシリテーターの長畑氏が定期的に JICA 研修員を水俣に連れてきてくれることによって、検証と実践の機会が与えられた。そのことなしには筆者および国際セクションでの理解は低いままだっただろう。改めて感謝したい。「海外の人に役に立つ研修を」という意識も重要だったが、今思えば英語での研修という点が、地元学への理解を深めるのに決定的に重要な要素の一つだった。日本語で「村丸ごと生活博物館」と言えば、それだけで何かそれらしい活動をしているという印象を与える。しかし、英語では Field Museum と表現するしかない。また地元学の最重要キーワードである「あるもの」も英語で表現すれば Resource というしかない。日本語であればある程度ごまかせていた部分が英語に変換することでごまかしがきかなくなった。そして筆者自身の理解もシャープにしていく必要性に迫られた。この事は殊のほか大きかった。そういった意味で今まで水俣に来てくれた全ての JICA 研修員にも感謝したい。JICA 研修で自らが考える地元学、外部者の役割を表現する度に「これで最終形だ」と思い続けてきた。しかし、終了直後の達成感から抜け出すと、登頂に成功しておらずまだ 6 合目だったことを毎回突きつけられる。JICA 研修 - 3 の時もそうだった。つまりこの論

文で明らかにしたことも外部者の役割で言えば6合目に過ぎないのだろう。残り4合はいつまで続くのだろうか。願わくは屋気楼のように決して辿り着けないものであって欲しい。

最後に地元学提唱者の吉本哲郎氏と「人間性未来論」などの著書により多くの気づきを与えてくれた中田豊一氏に感謝したい。彼らが切り開いた地平が無ければ、筆者は外部者の役割など少しも見いだせずに立ち往生していたことだろう。また雨森教授には筆者を的確に指導していただいた。何度も隘路にはまり込んだが、その度に方向性を示唆していただいた。それなくしては本稿は完成しなかったであろう。改めて感謝したい。

一連の取り組みを通じて、地元学における外部者の役割が見えてきた。5 - 4で明らかになったように、課題解決手法として地元学を捉えるのであれば水俣病の解決、過疎化以外についても一定程度の有効性があるはずである。しかし、実践例としてはまだ十分でなく、特に共有化段階で外部者がどう役割を果たしうるのかについてはまだ証明されていない。実践編地元学、中田学を用いて、水俣以外の課題への有効性を実証することが次の大きな課題である。その事が国際の場で証明されれば JICA 研修においても地元学の有益性が証明されることにもなるだろう。今回の成果を実践の場で役立てていくことでお世話になった方々への恩返しとなれば幸いである。

参考・引用文献

- 吉本哲郎『わたしの地元学』NEC クリエイティブ、1995
- ロバート・チェンバース、野田直人他訳『参加型開発と国際協力』明石書店、2000
- プロジェクト PLA『続入門社会開発』国際開発ジャーナル社、2000
- 中田豊一『ボランティア未来論』コモンズ、2000
- 現代農業『地域から変わる日本』農村漁村文化協会、2001
- カマル・フィヤル『Participatory Learning and Action』2003、
- 定松栄一『開発援助か社会運動か』コモンズ、2002
- 坂西卓郎ほか『ひろがる「水俣」の思い 水俣50年』作品社、2007
- 水俣病センター相思社編『もう一つのこの世を目指して - 水俣病センター相思社30年の記録』水俣病センター相思社、2004
- 坂西卓郎ほか『ごんずい100号』水俣病センター相思社編、2007
- いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク『経験をつなぐ』2007
- 雨森孝悦編『開発協力』日本福祉大学
- 雨森孝悦『テキストブック NPO』東洋経済新報社、2007
- 中田豊一『人間性未来論』竹林館、2007
- 山西優二ほか『地域から描くこれからの開発教育』新評論、2008
- ソマシュ・クマール著、田中治彦監訳『参加型開発による地域づくりの方法』明石書店、2008